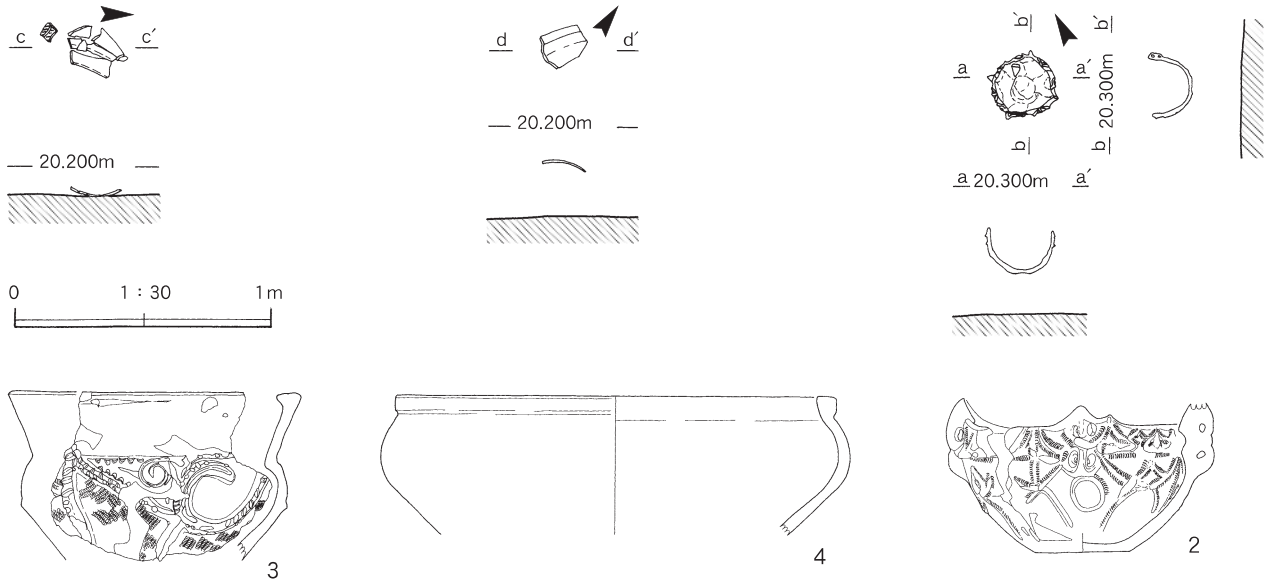


第39図　８号住居跡遺物出土状況（２）

８号住居跡出土土器（第40～44図）

１は炉体土器として出土した深鉢形土器である。下半部を欠失する。立ち上がりが直線的で、口縁部は平口縁を呈する。口唇部の一部が片口状であるが、上部に突起が付いていたとみられ、おそらく孔状になっていたであろう。胴部文様帯は横位に展開する三角形で構成される。刻みを有する隆帯が鋸歯状に展開し、区画文を３単位まで構成するが、途中から弧状に変化して入り組状のモチーフが挟まれる。区画文内部は爪形文、集合沈線、三叉文などで充填される。最大径は18.0㎝で現存高は15.0㎝である。胎土には白色粒子、細礫などを含む。色調は外面が明茶褐色、内面は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。なお、器面からアズキ亜属の種子圧痕が検出されている（第Ⅵ章第５節参照）。

２は覆土中から正置した状態で出土した浅鉢形土器である。器形は底部から内湾しながら緩やかに移行し、口縁部では段を設けて直線状に立ち上がる。口唇部には突起が４単位付される。突起は口縁部に移行し、眼鏡状の貫通孔を上下２段に貼付する。口唇部の断面形は先鋭し、内部は庇状の張り出しが２段廻る。胴部の文様は隆帯とこれに沿うように爪形文で描く。文様の構成は突起を中心として同じモチーフが４単位にわたって繰り返される構成である。突起は昆虫類を類推させ、頭部と胴部、４対の脚らしい表現がうかがえる。また、突起を挟んだ両側には菱形の貼付文を中心に２対の弧状の隆帯が派生する。土器の最大径は28.4㎝、突起を含む高さは16.4㎝である。胎土には片岩の細礫を含む。色調は外面が茶褐色を呈し、内面は明茶褐色である。また内外面ともに赤彩の痕跡が認められる。焼成は良好である。

３は浅鉢形土器で口縁部から胴部下半まで残存する。胴部は球形を呈し、頸部で強く屈曲する。口唇部は平坦に仕上げられ、内側へ庇状に張り出す。胴部の文様帯は刻みのある隆帯が横走するが、途中で刻みが消失し、２本隆帯となって弧状に変化する。地文はRLの単節縄文が施される。口縁部は無文帯で、胴部との境は三角押し文を廻らせる。復元最大径は31.2㎝、現存高は15.6㎝を測る。胎土には白色粒子、細礫を含む。内外面とも茶褐色を呈し、焼成はやや不良である。

４は浅鉢形土器である。無文で口縁部から胴部下半まで残存するが底部を欠失する。器形は胴部上半で内

湾し、口縁部で外側に屈曲しながら直線状に立ち上がる。口縁部は矩形に肥厚し、口唇部は平滑である。復元最大径は47.0㎝、現存高は14.6㎝である。胎土には細礫、片岩を含み、色調は外面が暗褐色、内面は暗茶褐色で黒斑がみられる。焼成は良好である。

５～10は深鉢形土器の口縁部に付く突起である。５は山形状の突起で端部が先鋭する。正面が外側で、中央部に大きな貫通孔を有する。表面には刻みを有する楕円形隆帯が、口唇部から垂れ下がるように貼付される。裏面は涙形の隆帯が貫通孔を取り囲むように貼付される。右側面端部は爪形文を施すが、左側面は無文である。６は楕円形を呈する突起で中央部に貫通孔を有する。正面が外側を向く。表裏面ともに貫通口の周囲に集合沈線を施す。７は三角形を呈する眼鏡状突起で、横位の貫通孔を有する。突起は正面に向かってやや左側にゆがむ。弧状の集合沈線が孔の周囲に施される。下半に穿たれる貫通孔の裏面には同心円状の沈線が描かれる。８は胴部に貼付される突起で、横位に穿たれる孔は貫通しない。孔の周辺が隆起しながら外側へ突出し、端部で結節してここから弧状の沈線が描かれる。結節部の下部にも円孔が施される。９は山形の突起で外側に屈曲する。口縁から垂下する幅広の隆帯は斜状の集合沈線が施される。周囲は隆帯による区画文である。10は円筒形を呈する深鉢形土器で、口唇部に蛇体状の突起が突出する。

11～13は刻みを有する隆帯と爪形文が施された口縁部片である。11は横位に平行する文様帯である。12は区画文内に交互の短沈線を施す。13は隆帯に沿って爪形文を施す。

14は口唇部直下に連続する爪形文を施す。15は波状口縁を呈する深鉢形土器で隆帯による区画文内は集合沈線が充填される。

16は円筒形を呈する深鉢形土器で、口唇部が内側に突出する。口唇直下に蓮華文が施される隆帯が廻る。胴部は細かいRLの単節縄文である。17は口唇部が肥厚し、口縁部は無文帯となる深鉢形土器である。頸部には短沈線を交互に施した隆帯が廻る。18は半裁竹管による縦位の集合沈線を施す。

19～25は隆帯により区画文を構成する深鉢形土器の胴部片である。19は爪形文を充填する。20～22は集合沈線を充填する。23は幅広の爪形文で三叉文を描く。24は刻みを有する横位の隆帯で楕円形の懸垂文が派生する。25は隆帯の刻みが矢羽状である。

26は隆帯に縄文を施す。27は沈線による区画文に爪形文が沿う。28は縦位の沈線文内に蓮華文を描く。

29、30は地文に撚糸文を施す。29の隆帯による懸垂文は横位に蛇行する。31は沈線による区画文内に爪形文と短沈線を充填する。

32～34は集合沈線による充填文である。32、33は半裁竹管で施文しており半肉彫状で、33は押し引きによる爪形文として施される。

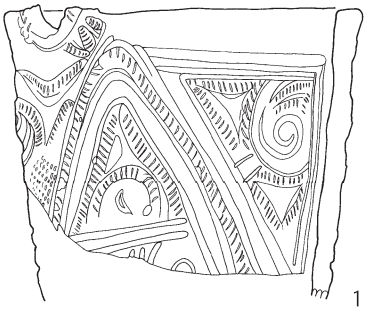
35は深鉢形土器の底部片である。底部から立ち上がり、胴部下半で屈曲する器形である。地文はRLの単節縄文である。

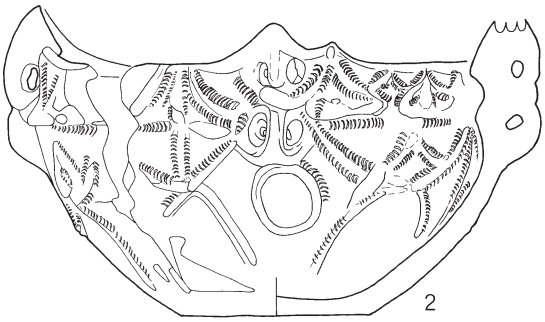
36、37は浅鉢形土器でいずれも無文である。36は頸部で内側に屈曲し、口唇端部でわずかに外反する。37は口縁部が横長に肥厚する。

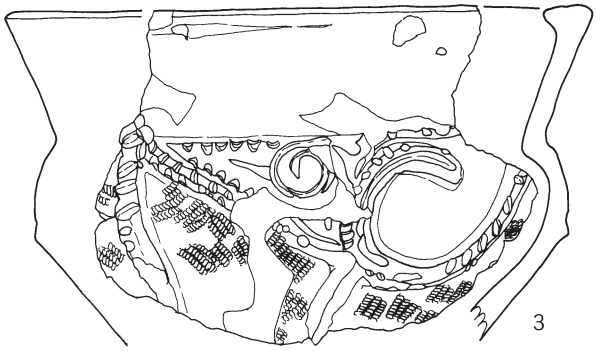
38は大型の波状口縁を呈する深鉢形土器の波頂部である。口唇部から隆帯が派生して垂下する。隆帯上には押圧が施され、正面に角押文を施文す。阿玉台Ⅱ式である。

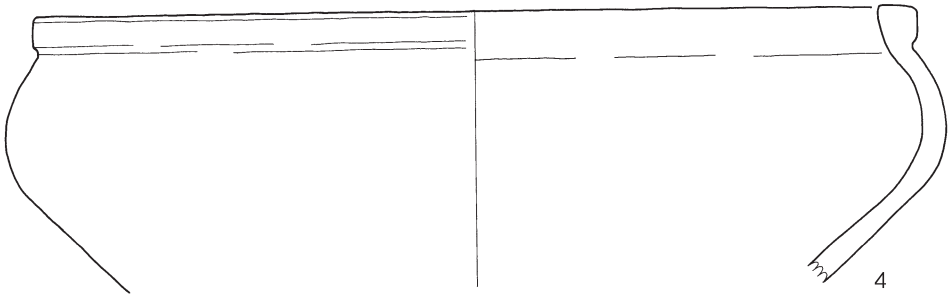
39は浅鉢形土器の口縁部である。角押文による楕円形区画文内には小波状の角押文を施す。40も浅鉢形土器である。口縁部は内屈して角押文により楕円形の区画文を施す。内部には同様に角押文による小波状のモチーフを２条充填する。41、42は横位の刻目文である。これらは阿玉台Ⅰb式である。

43は口唇端部と頸部の肥厚部に刻みを有する。口縁部文様帯は横位の角押文である。44、45は幅広の爪形文を横位に施す。45は隆帯により弧状の区画文を描き、爪形文を充填する。46は平口縁から垂下する隆帯が



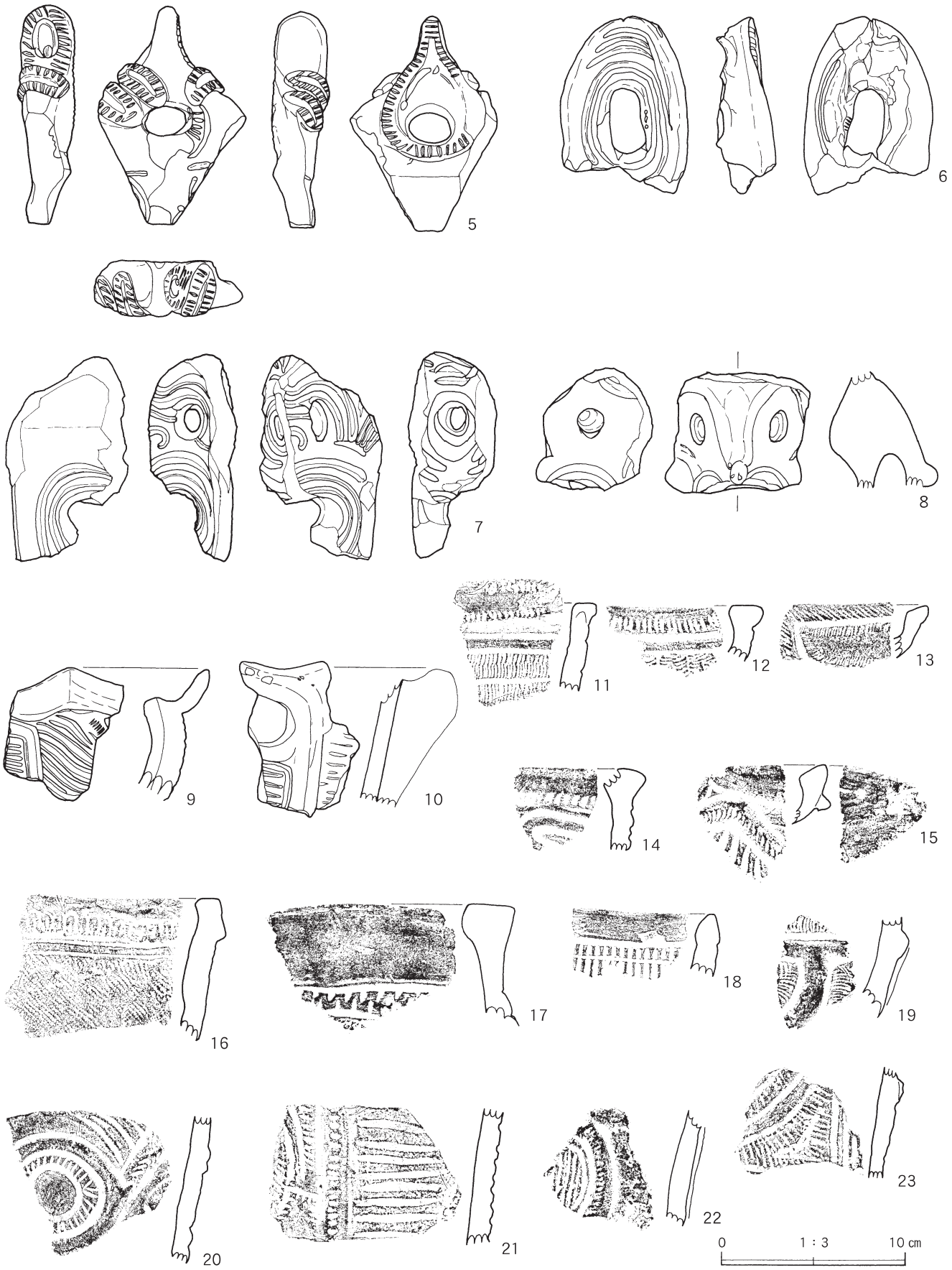




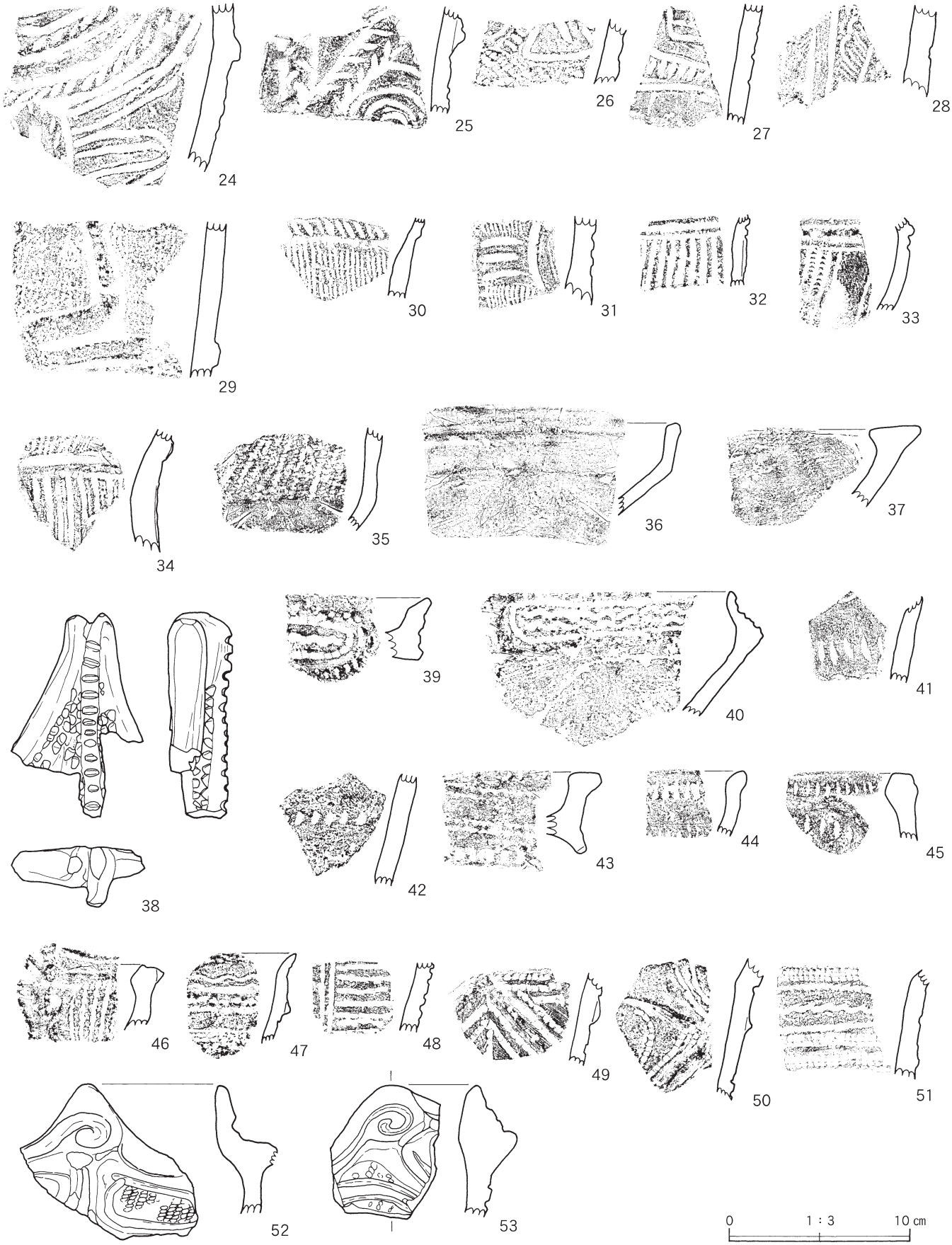


0　1：4　10cm

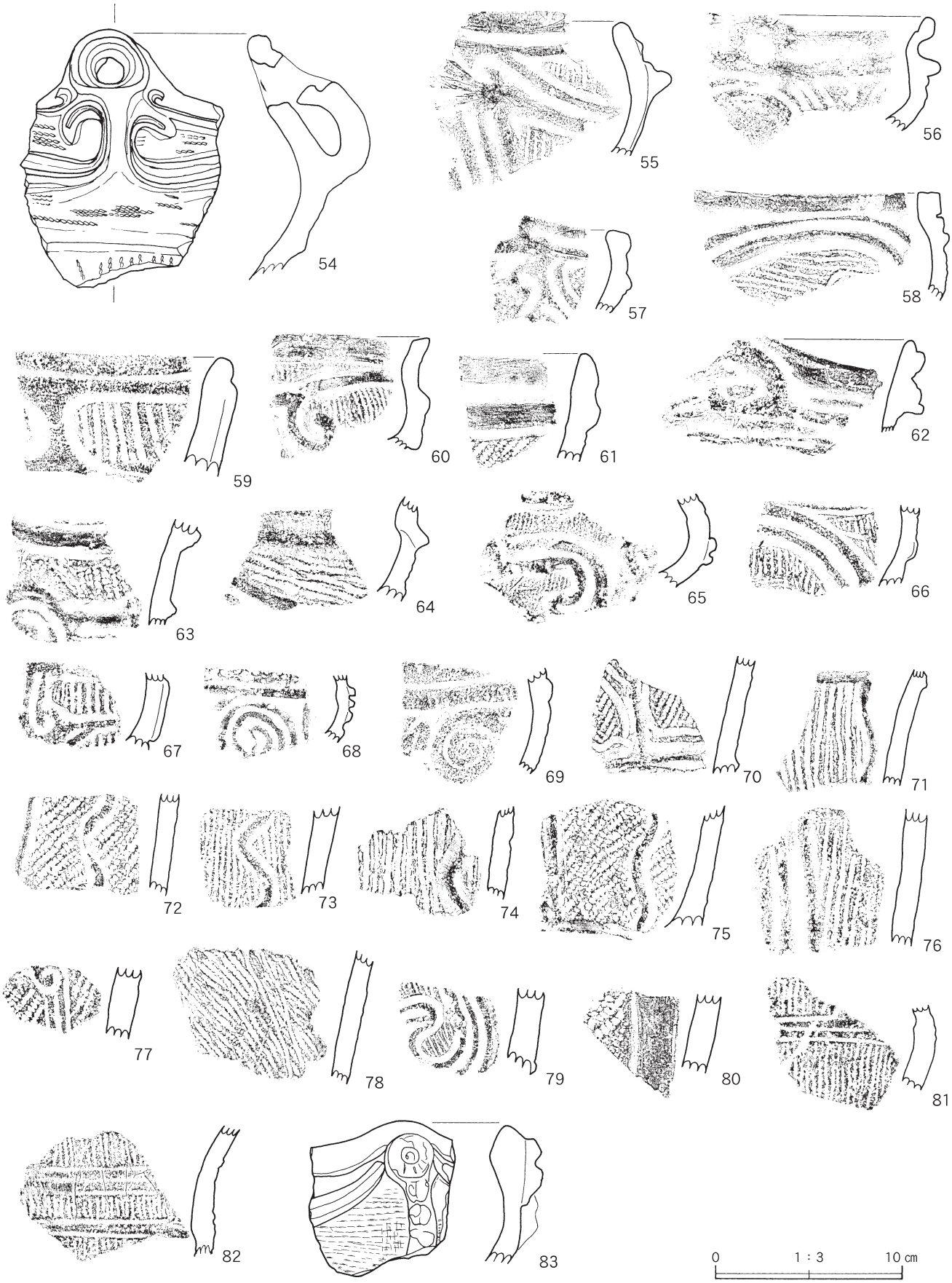
第40図　８号住居跡出土遺物（１）



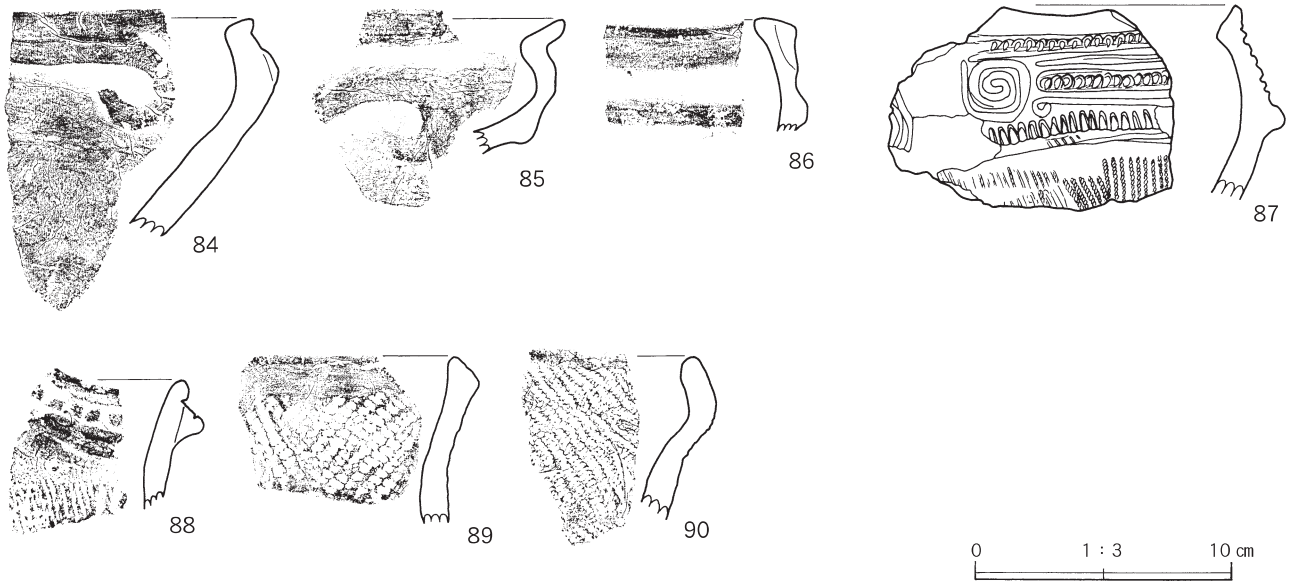
第41図　８号住居跡出土遺物（２）



第42図　８号住居跡出土遺物（３）



第43図　８号住居跡出土遺物（４）



第44図　８号住居跡出土遺物（５）

刻みを有し、これに沿って縦位の角押文を施文する。47はわずかに波状を呈する深鉢形土器で、横位の有節沈線文、角押文、波状沈線が平行して廻る。48は角押文による区画文内を横位の角押文で充填する。

49は隆帯による三角形の区画文内を角押文で充填する。50は口縁部付近の破片で、隆帯に沿って角押文を施す。これらは阿玉台Ⅱ式である。

51は微隆帯に沿って爪形文を施し、小波状を呈する三角押文がこれに平行して横位に廻る。阿玉台Ⅲ式である。

52、53は波状口縁を呈する口縁部片で、波頂部には山形の突起が配される。突起には太い沈線による渦巻文が描かれ、口縁部文様帯へ移行する。口縁部は隆帯による楕円形区画文でRLの単節縄文が施される。

54は加曽利ＥⅠ式のキャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁部に突起を設け、突起は円孔を有する橋梁形で中空である。突起から垂下する隆帯は左右対称に２本隆帯となり、横Ｓ字状文に変化する。また地文は横位の撚糸文を施す。頸部文様帯は隆帯で区画され、縦位の撚糸文を施文する。

55～62は深鉢形土器の口縁部片である。55は２本隆帯による弧線の結節点が渦巻文で連結され、繋ぎ弧文となる。56、57は平口縁の口唇部に小突起が配される。ともに突起には円孔が穿たれる。58は矩形に肥厚する口縁部である。２本隆帯は口唇部直下に貫入して貼付される。地文は横位の撚糸文である。59は隆帯による楕円形区画文の内部に集合沈線が充填されている。60は撚糸文を地文として横位の隆帯から渦巻文が垂下する。61はわずかに波状口縁を呈する。62は波状口縁を呈する深鉢形土器である。口縁部直下に渦巻文を配し、横走する隆帯を繋いでいる。

63～66は２本隆帯により横位のモチーフが貼付される。63はRLの単節縄文、他は撚糸文が地文となる。65は横Ｓ字状文の一部である。67は楕円形区画文に集合沈線を充填する。

68、69は渦巻文を描く土器である。68は細い隆帯が貼付され、69は沈線により渦巻文を描く。

70は口縁部文様帯の一部である。楕円形区画文は浅い沈線で描かれ、直線状の隆帯に貼付される。

71～75は蛇行隆帯の懸垂文が施される。71は頸部と胴部を横位の隆帯で区画する。74は地文に集合沈線を施す。75は底部付近である。蛇行隆帯と垂下する直線状の隆帯が交互に配される。76は平行する隆帯による懸垂文で、隆帯間は磨り消されている。

77は沈線による懸垂文に渦巻文が組み込まれる。78は地文を施した後の２本の平行沈線による垂下文である。79は３本隆帯により渦巻文を描く。

80は沈線による懸垂文内を磨り消す。加曾利ＥⅢ式である。

81、82は連弧文土器の胴部片である。いずれも撚糸文を地文とし、横位の平行沈線を施す。81は胴部の上半部で、82は括れ部である。

83は深鉢形土器の波状口縁部である。波頂部に刻みのある円形隆帯を貼付し、そこから指頭押圧のある隆帯が垂下する。勝坂Ⅲ式である。

84～86は浅鉢形土器である。85は口縁部の隆帯が途中で変化して渦巻文となる。86は口縁部が肥厚して内湾し、口唇部は外側に屈曲する。口縁部文様帯は幅の広い渦巻文である。87は内湾する口縁部片で隆帯が横位の文様帯を構成する。

87～89は中峠式系の土器である。87は口唇部がやや外反し、波状口縁を呈する。文様帯は沈線によるモチーフが描かれ、端部には渦巻文が付される。沈線間には刻みが施され、頸部とは外側へ突出する隆帯により区画される。頸部には細かい撚糸文が充填される。88は緩やかな波状口縁で交互の短沈線による文様が上下を隆帯で区画している。89は地文のみを施す破片で、外反しながら立ち上がり、口唇部で内屈する。RLの単節縄文が羽状を模して施文される。

90は加曾利ＥⅢ式の深鉢形土器で、口縁部で内湾する。地文はRLの単節縄文である。

９号住居跡（第45・46図、第９表）

C1グリッドに位置する。全体の約1/4が調査され、北側1/4は第２次調査区に広がり、東半部は調査区外である。第１次調査で確認された範囲では長径が約2.3m、短径約1.8m、深さ0.4mで、プランは長楕円形と考えられる。床面は平坦で硬く締まっている。床面から壁溝は検出しなかった。壁は緩やかに立ち上がり、住居の主軸はＮ－35°－Ｗを指向すると想定できる。

覆土はローム粒子、炭化物粒子を含む暗茶褐色土を主体に堆積する。遺物は覆土中に多く混入しており、住居廃絶後の埋没過程で土器の廃棄が行われたと想定される。

炉跡は調査範囲で検出しなかった。

ピットは第２次調査の検出分を含め６基が検出され、主柱穴はP4とP5であると考えられる。それぞれの深さはP4－33.6㎝、P5－66.6㎝である。

床面直上から出土した遺物は加曾利ＥⅡ式期が主体であり、住居の帰属も同時期と判断される。

第９表　９号住居跡柱穴計測表　（単位㎝）

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	93.0	66.4	P3	44.0	76.7	P5	55.0	66.6
P2	53.0	81.5	P4	48.0	33.6	P6	54.0	23.4

９号住居跡出土土器（第47・48図）

１は深鉢形土器の突起部である。口縁部は波状を呈すると考えられ、波頂部に円錐形の隆帯を貼付する。ここから渦巻状に刻みのある隆帯が胴部へ垂下し、途中で分岐しながら区画文を描く。

２は波状口縁を呈する口縁部片である。外側に隆帯が突出し、裾部に沈線を施す。３は隆帯による区画文

が施される。区画文内部は集合沈線が充填される。

４～８は刻みを有する隆帯が区画文を描出する一群である。４、５は集合沈線が充填される。６は地文にRLの単節縄文が施される。また、隆帯に沿って沈線が施され、地文は磨り消されている。７、８は方形の区画文である。

９は深鉢形土器の底部付近の資料である。外側に強く算盤玉状に屈曲する器形で、地文はRLの単節縄文である。

10は円筒形の深鉢形土器で、弧状の隆帯が区画文となって内部に沈線で渦巻文を描く。勝坂式である。

11～14は阿玉台式土器である。11は口縁部片で波状を呈し、内部に屈曲する。胴部には眼鏡状の隆帯が貼付され、ここから断面三角形の隆帯が派生して横走する。阿玉台Ⅱ式である。12は隆帯に沿って１列の角押文が施される阿玉台Ⅰb式である。13は隆帯を挟み込むように爪形文が沿う。阿玉台Ⅲ式である。14は隆帯上に縄文を施す区画文としている。隆帯には沈線が沿い、内部は横位の平行沈線文が主体となる。阿玉台Ⅳ式である。

15は加曾利ＥⅠ式の口縁部片で、貫通孔を有する半円状の突起部である。

16、17は平口縁の資料である。16は口縁端部が肥厚する。ともに内湾する器形で２本隆帯による渦巻文を描く。16の地文は横位の条線であり、17は無節Ｌの撚糸文である。

18は隆帯による区画文が施され、内部は無文である。弧状のモチーフ内には貫通孔を穿つ。19は２本隆帯による区画文が描かれる。隆帯は端部から分岐し、小さな渦巻文に変化する。区画文内は粘土を削り取り、レリーフ状として内部にRLの単節縄文を施す。

20は２本隆帯の結節点に渦巻文を配する突起が貼付される。

21、22同一個体であると思われる。口唇部に貼付される隆帯と縦位の短い隆帯が、斜位の主文様である隆帯を繋いでいる。地文は横位に転がされた撚糸文である。23は２本隆帯が渦巻文を描く口縁部片である。地文は撚糸文で、頸部にわずかながら弧状の沈線文がうかがえる。24は横位に展開する２本隆帯が分岐して円形の文様を取り囲む。

25は２本隆帯による渦巻文である。小波状の隆帯が口縁部に沿って廻る。26、27は口縁部と胴部の境付近で、口縁部は横位、胴部は縦位の撚糸文である。28は２本隆帯による渦巻文で、地文はRLの単節縄文による撚糸文である。29は口縁部のモチーフと頸部を区画する隆帯を縦位の短い隆帯で連結させる。

30は頸部と胴部の境付近の資料である。断面が三角形の隆帯から３本の平行する懸垂文が派生する。地文は撚糸文で、小波状の沈線が頸部に沿って廻る。31は頸部付近の資料で、地文の撚糸文が施された後、半裁竹管による波状文を描く。32は胴部片で平行する２本の隆帯による懸垂文である。33は蛇行隆帯を貼付する。

34は口縁部片で隆帯による楕円形区画文である。浅鉢形土器の可能性もある。

35は細かい撚糸文を地文として、２本隆帯による渦巻文が貼付される胴部片である。36は平行沈線による胴部の懸垂文である。

37は深鉢形土器の底部で、直線的に立ち上がる器形である。半裁竹管による懸垂文が底面直上まで達している。

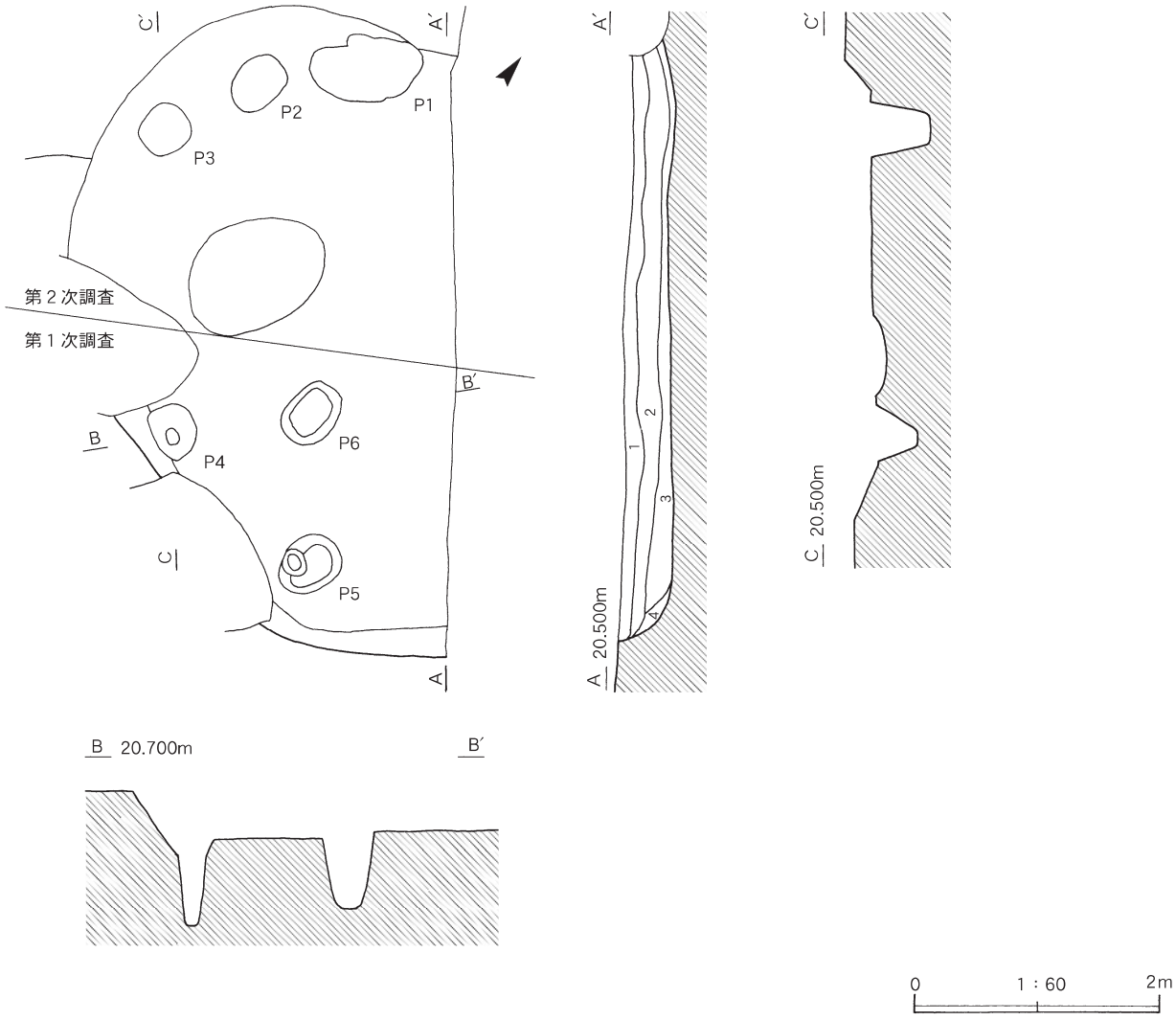
38、39は無文の浅鉢形土器である。38は胴部が内湾し、口縁部が外側へ屈曲して矩形に肥厚する。39は雲母の細片を多く含んでいる。阿玉台式の可能性がある。

40は連弧文土器の胴部片である。地文は撚糸文で４本の沈線が弧状に描かれる。

41は深鉢形土器の頸部付近の資料である。口縁部文様帯は隆帯により方形に区画され、地文は撚糸文が施される。頸部は無文である。42は沈線と隆帯により密な渦巻文を描く。

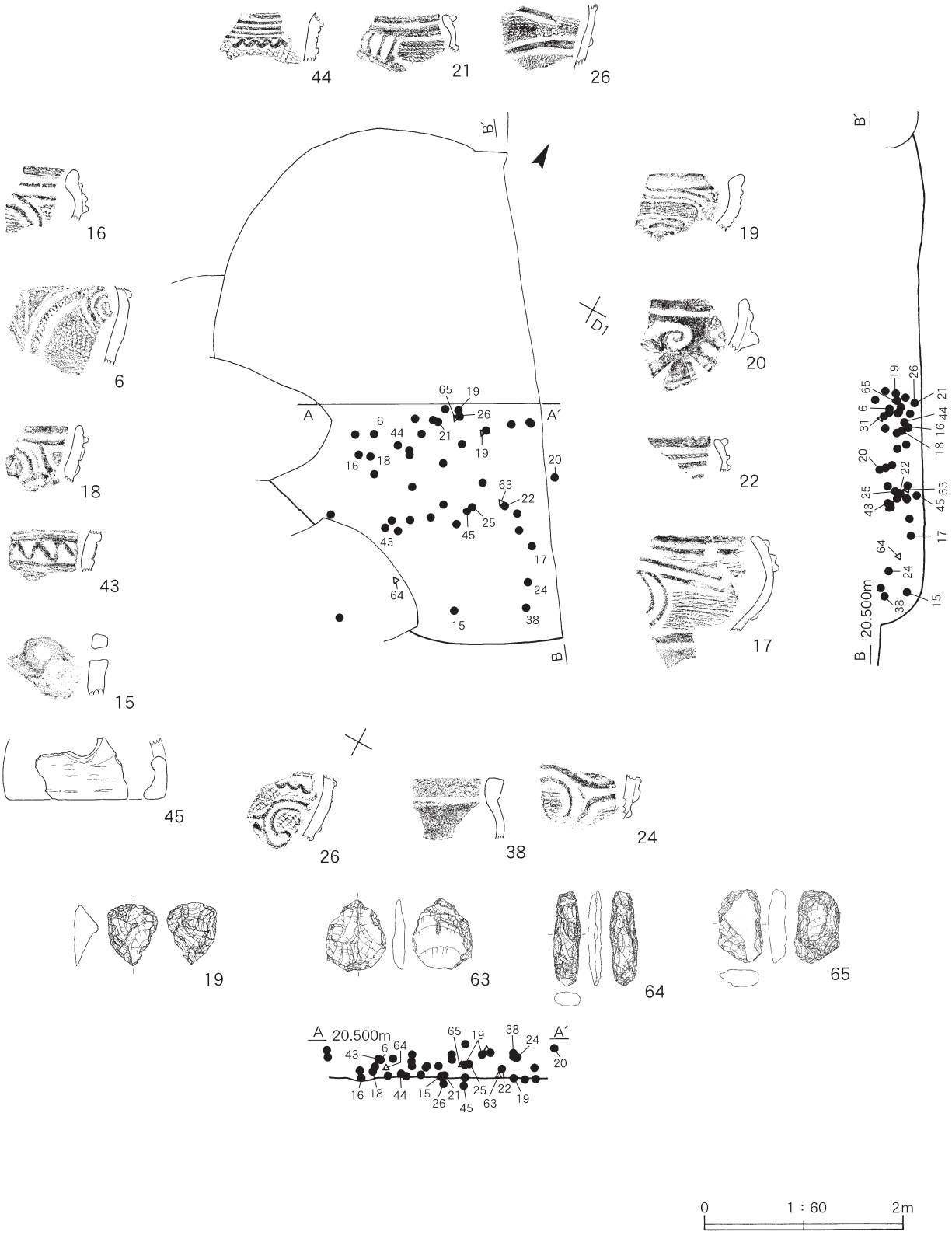
43、44は曽利式系の土器である。ともに頸部片で小波状の隆帯が横位に廻る。

45は器台である。やや内湾しながら立ち上がる。底面は内側に突出して平坦に仕上げられる。胴部には貫通孔が配される。



第１層　明茶褐色土　炭化物粒子、焼土粒子若干含む　ローム粒子を多く含む
第２層　黄茶褐色土　炭化物粒子・焼土粒子多く含む
第３層　暗黄褐色土　ローム粒子、炭化物粒子含む
第４層　茶 褐 色 土　ローム粒子、焼土粒子多く含む

第45図　９号住居跡



第46図　９号住居跡遺物出土状況

第47図　９号住居跡出土遺物（１）

第48図　９号住居跡出土遺物（２）

（２）土坑

縄文時代の土坑は覆土や遺物の出土状態から判断し、60基を確認した。その分布は調査区全域から検出されており、規模、形態はさまざまであった。

遺構の所属する時期は縄文時代中期後半から後期前半にわたる。土坑については一覧表として第10表に記載し、ここでは特徴的な土坑について記載する。

４号土坑（第49図、第10表）

３号住居跡の南側でD8グリッドに位置する。長径は128㎝、短径108㎝、深さは最深部で42㎝の規模である。プランは楕円形を呈する。覆土は暗茶褐色土を主体として堆積していた。壁の立ち上がりは急で、床面はやや南側に傾斜する。

34号土坑（第50図、第10表）

G8グリッドに位置する。長径は126㎝、短径96㎝、深さは最深部で68㎝である。プランは不整楕円形を呈し、床面にピットを１基穿つ。

35号土坑（第50図、第10表）

F7グリッド付近の１号住居跡の東側に位置する。規模は長径90㎝、短径84㎝で、平面形はほぼ円形を呈

する。深さは最深部で54cmである。床面は平坦でピットが穿たれる。壁の立ち上がりは緩やかである。

40号土坑（第50図、第10表）

D7グリッドに位置する。北側及び南側がピット及び１号溝によって切られている。土坑の規模は長径170cm、短径106cm、深さは32cmを測る。床面は平坦でピットが穿たれる。壁の立ち上がりは急である。

42号土坑（第50図、第10表）

C7グリッドに位置する。43号土坑を切っており、西半部は調査区外へ延びている。平面形は楕円形を呈すると想定できる。規模は調査範囲で長径162cm、短径132cm、深さは12cmである。床面は平坦で、壁の立ち上がりは階段状に２段となっている。

45号土坑（第51図、第10表）

C6グリッドに位置する。６号住居跡の床面から検出された。平面形は楕円形を呈する。規模は長径146cm、短径88cm、深さは最深部で50cmである。床面は平坦で中央部にピットが穿たれる。壁はやや急な立ち上がりである。

46号土坑（第51図、第10表）

D5グリッドに位置する。４号住居跡に西側を切られている。長径は162cm、短径は72cm、深さは32cmを測る。平面形はＬ字状の方形プランを呈している。床面はピット等の影響で凹凸が激しい。壁の立ち上がりは急である。

47号土坑（第51図、第10表）

D4グリッドに位置する。平面形は方形で、長径は172cm、短径80cm、深さは42cmを測る。床面は平坦で壁の立ち上がりはやや急である。

63号土坑（第51図、第10表）

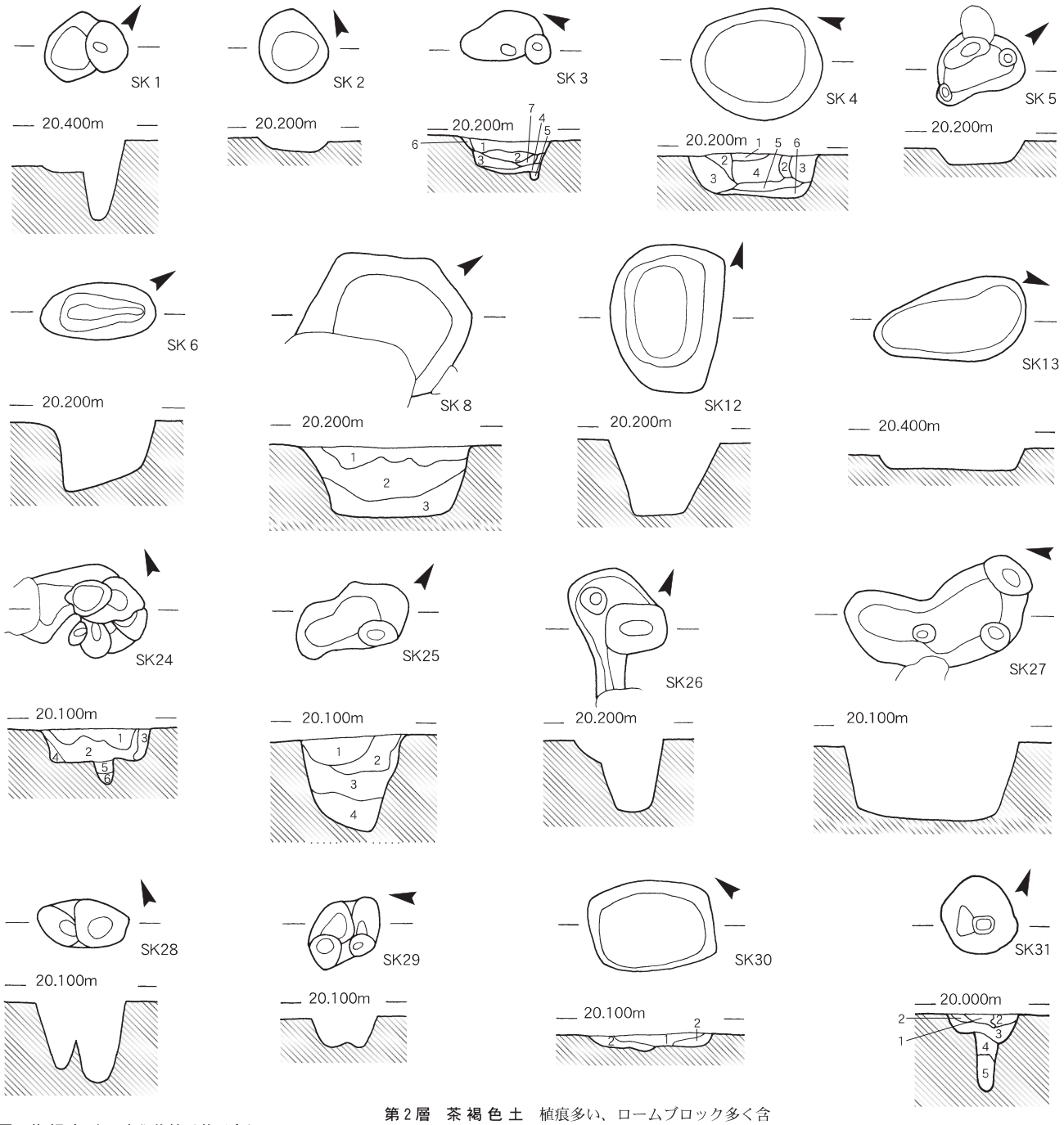
B4グリッドに位置する。64号土坑を切っている。平面形は不整円形で、規模は長径149cm、短径136cm、深さ48cmである。床面は丸底状であり、壁の立ち上がりは南東側が直線状に緩やかであり、北西側は急である。

64号土坑（第51図、第10表）

B4グリッドに位置し、63号土坑に南端を切られ、65号土坑を切っている。平面形は長楕円形を呈すると想定される。調査範囲で長径232cm、短径126cm、深さは34cmの規模である。床面はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりは急で直線状である。帰属時期は縄文中期後半と想定される。

65号土坑（第51図、第10表）

B4グリッドに位置している。64号土坑に切られる。平面形は楕円形を呈し、規模は調査範囲で長径122cm、短径80cm、深さ46cmである。床面は平坦で、ピットが穿たれる。壁は急な立ち上がりである。帰属時期は縄文時代中期後半と想定される。



SK3
第１層　茶褐色土　炭化物粒子若干含む
第２層　茶褐色土　焼土粒子（φ１㎜）若干含む
第３層　暗茶褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多い
第４層　暗茶褐色土　炭化物粒子若干含む
第５層　褐　色　土　ローム粒子若干含む
第６層　明茶褐色土　焼土粒子若干含む
第７層　黒褐色土　焼土粒子多く含む

SK4
第１層　黒褐色土　ローム粒子若干含む
第２層　暗茶褐色土　炭化物・ローム粒子若干含む
第３層　暗黄褐色土　ロームの再堆積層　炭化物若干含む
第４層　茶褐色土　ロームブロック多く含む
第５層　暗茶褐色土　ローム粒子多く含む
第６層　茶褐色土　ローム粒子・炭化物多く含む

SK8
第１層　褐　色　土　植痕多い、ロームブロック多く含む
第２層　茶褐色土　植痕多い、ロームブロック多く含む
第３層　暗褐色土　砂質　炭化物粒子多く含む

SK24
第１層　茶褐色土　ローム粒子・炭化物粒子若干含む
第２層　明茶褐色土　ロームブロック若干含む
第３層　灰茶褐色土　ロームブロック・炭化物粒子多く含む
第４層　暗茶褐色土　炭化物粒子若干含む
第５層　褐　色　土　ローム粒子・炭化物粒子多く含む
第６層　暗褐色土　ローム粒子若干含む

SK25
第１層　褐　色　土　炭化物粒子少量含む
第２層　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少量含む
第３層　暗黄褐色土　ロームブロック多く含む
第４層　黒褐色土　ローム粒子少量含む

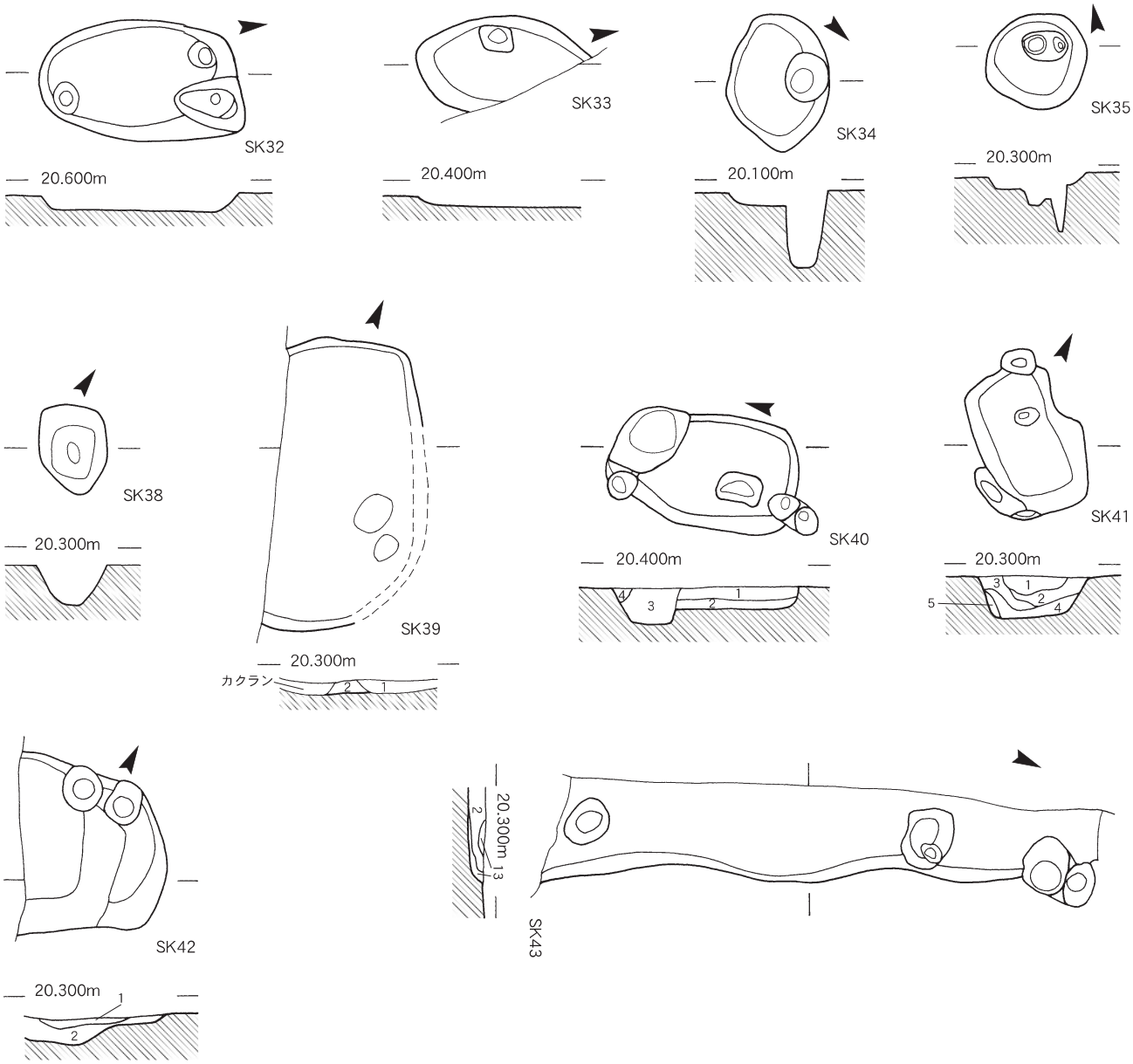
SK30
第１層　茶褐色土　ローム粒子・炭化物粒子多く含む
第２層　黄褐色土　ロームの再堆積層、黒色土若干混じる

SK31
第１層　茶褐色土　ローム粒子・炭化物粒子多く含む
第２層　明茶褐色土　炭化物粒子多く含む
第３層　明褐色土　ロームブロック・炭化物粒子多く含む
第４層　茶褐色土　炭化物粒子少量含む　１層より色調暗い
第５層　暗茶褐色土　ローム粒子少量含む

第49図　土坑（１）

68号土坑（第52図、第10表）

C2グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。長径は142㎝、短径122㎝、深さは16㎝である。底面は平坦でピットが１基穿たれる。壁の立ち上がりは緩やかである。帰属時期は加曽利ＥⅠ式～ＥⅡ式期である。



SK39
第１層　黒褐色土　ローム粒子若干含む
第２層　黄褐色土　ロームを主体とした堆積層

SK40
第１層　暗茶褐色土　炭化物・ローム粒子を少量含む
第２層　暗黄褐色土　ローム粒子を多く含む
第３層　茶褐色土　ローム粒子を多く含む、炭化物少量含む
第４層　暗黄褐色土　ローム粒子を多く含む

SK41
第１層　黒褐色土　ローム粒子・ブロック（φ20㎜）多く含む
第２層　暗黄褐色土　ロームブロック（φ20㎜）多く含む
第３層　茶褐色土　炭化物若干含む
第４層　明茶褐色土　ロームブロック（φ20㎜）若干含む
第５層　褐　色　土　ローム粒子・炭化物若干含む

SK42
第１層　暗茶褐色土　ロームブロック若干含む
第２層　黒茶褐色土　ロームブロック（φ20㎜）を多く含む

SK43
第１層　茶褐色土　ローム粒子多く含む
第２層　黒褐色土　ロームブロック（φ３㎜）多く含む
第３層　暗茶褐色土　ロームブロック（φ10㎜）多く含む

第50図　土坑（２）

74号土坑（第52図、第10表）

D2グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈している。長径は164cm、短径106cm、深さは最深部で56cmを測る。底面はやや丸底状でピットが穿たれる。壁の立ち上がりは急である。帰属時期は縄文時代中期後半と想定される。

77号土坑（第52図、第10表）

１号住居跡の東側で、E6グリッドに位置する。平面形は隅丸の三角形を呈する。南側の一部をピットに切られる。床面はほぼ平坦であるが、２基のピットが穿たれる。壁は緩やかに立ち上がり、同様にピットを検出した。規模は長径160cm、短径150cm、深さは最深部で55cmである。

85号土坑（第52図、第10表）

A4グリッドに位置する。西側半部は調査区外へ延びている。平面形は楕円形を呈すると想定される。規模は調査範囲で長径176cm、短径124cm、深さ34cmである。床面は北側に向かって凸状呈して傾斜する。また焼土の堆積が２か所確認された。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土はローム粒子を多く含む暗黄茶褐色土が主体となる。遺構の帰属時期は出土遺物から加曾利ＥⅡ式期に比定される。

86号土坑（第10表）

８号住居跡北側に隣接しており、A2グリッドに位置している。平面形は楕円形を呈する。規模は長径160cm、短径85cm、深さは20cmである。床面は平坦であり、壁の立ち上がりも緩やかである。出土遺物は阿玉台式土器が主体であり、遺構の時期も当該期と考えられる。

92号土坑（第53図、第10表）

F5グリッドに位置する。プランの東半部は調査区外へ延びている。平面形は円形と考えられ、漏斗状に落ち込む形態である。調査範囲において確認された規模は長径322cm、短径は154cm、深さは272cmである。覆土の下半部は水平堆積を示すが、４層付近はロームブロックの混入が多く、埋没過程における人為的な埋戻しが想定され、このことを示すかのように、このレベルで北から南へ向かって、礫群が投棄されたような状況で検出されている。礫群中には石器を含んでおり、石材と石器を一括して廃棄した状況が看取される。

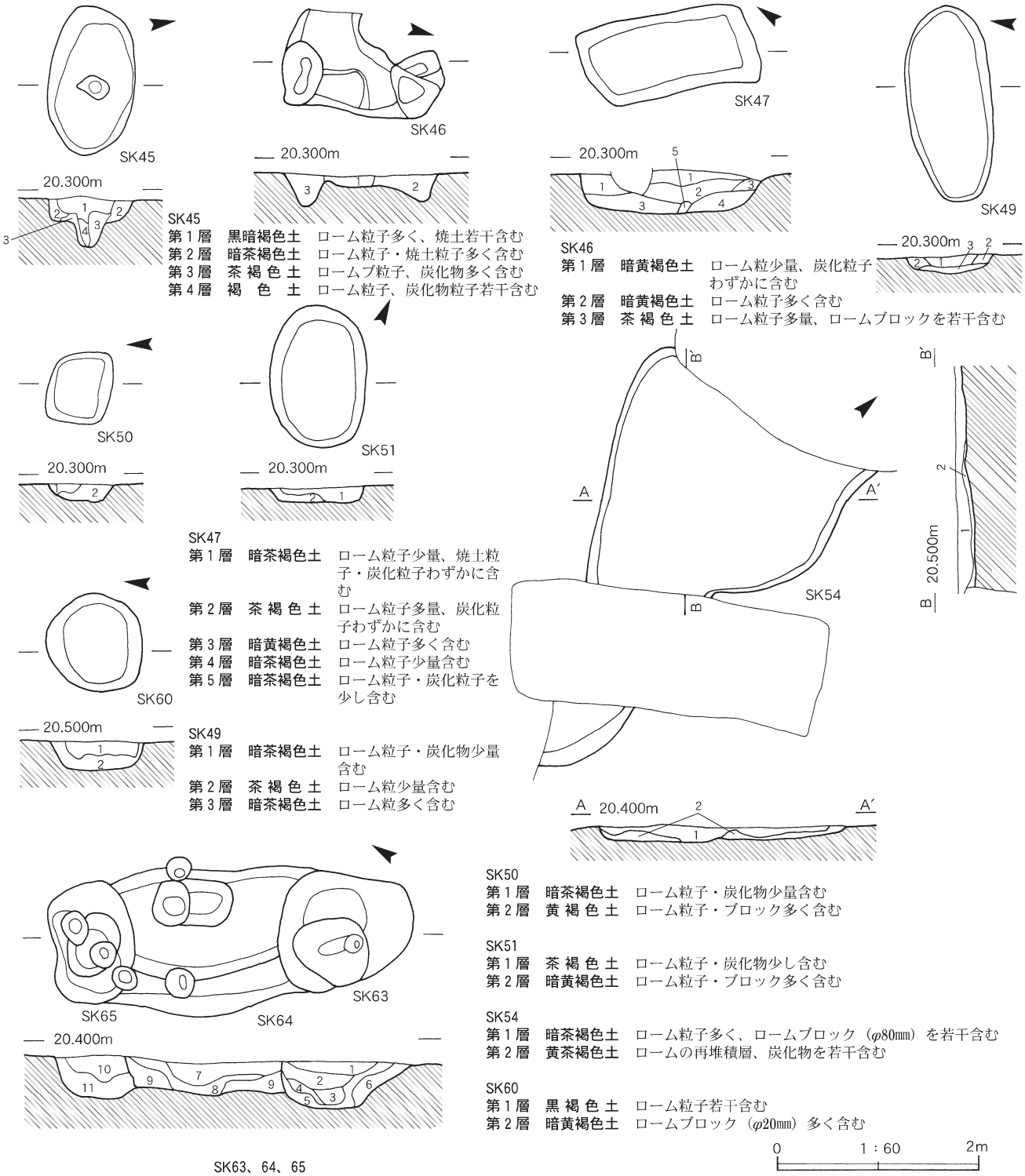
なお、土坑は完掘していないが、その形態等から落とし穴であると考えられる。石器以外の遺物は少ないが、加曾利ＥⅡ式の土器が出土している。

４号土坑出土土器（第54図１～３）

１～３は深鉢形土器の胴部片である。１、３はいずれも地文に撚糸文を施し、懸垂文を配する。１は沈線、３は平行する２本の隆帯を描く。２は地文のみでRLの単節縄文である。いずれも加曾利ＥⅠ式期に比定される。

34号土坑出土土器（第54図４）

４は有孔鍔付土器の胴部片である。沈線により区画されたモチーフには縄文帯を磨り消しにより描き、内部にRLの単節縄文が配される。加曾利ＥⅡ式である。



SK45
第１層　黒暗褐色土　ローム粒子多く、焼土若干含む
第２層　暗茶褐色土　ローム粒子・焼土粒子多く含む
第３層　茶 褐 色 土　ローム粒子、炭化物多く含む
第４層　褐　色　土　ローム粒子、炭化物粒子若干含む

SK46
第１層　暗黄褐色土　ローム粒少量、炭化粒子わずかに含む
第２層　暗黄褐色土　ローム粒子多く含む
第３層　茶 褐 色 土　ローム粒子多量、ロームブロックを若干含む

SK47
第１層　暗茶褐色土　ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子わずかに含む
第２層　茶 褐 色 土　ローム粒子多量、炭化粒子わずかに含む
第３層　暗黄褐色土　ローム粒子多く含む
第４層　暗茶褐色土　ローム粒子少量含む
第５層　暗茶褐色土　ローム粒子・炭化粒子を少し含む

SK49
第１層　暗茶褐色土　ローム粒子・炭化物少量含む
第２層　茶 褐 色 土　ローム粒少量含む
第３層　暗茶褐色土　ローム粒多く含む

SK50
第１層　暗茶褐色土　ローム粒子・炭化物少量含む
第２層　黄 褐 色 土　ローム粒子・ブロック多く含む

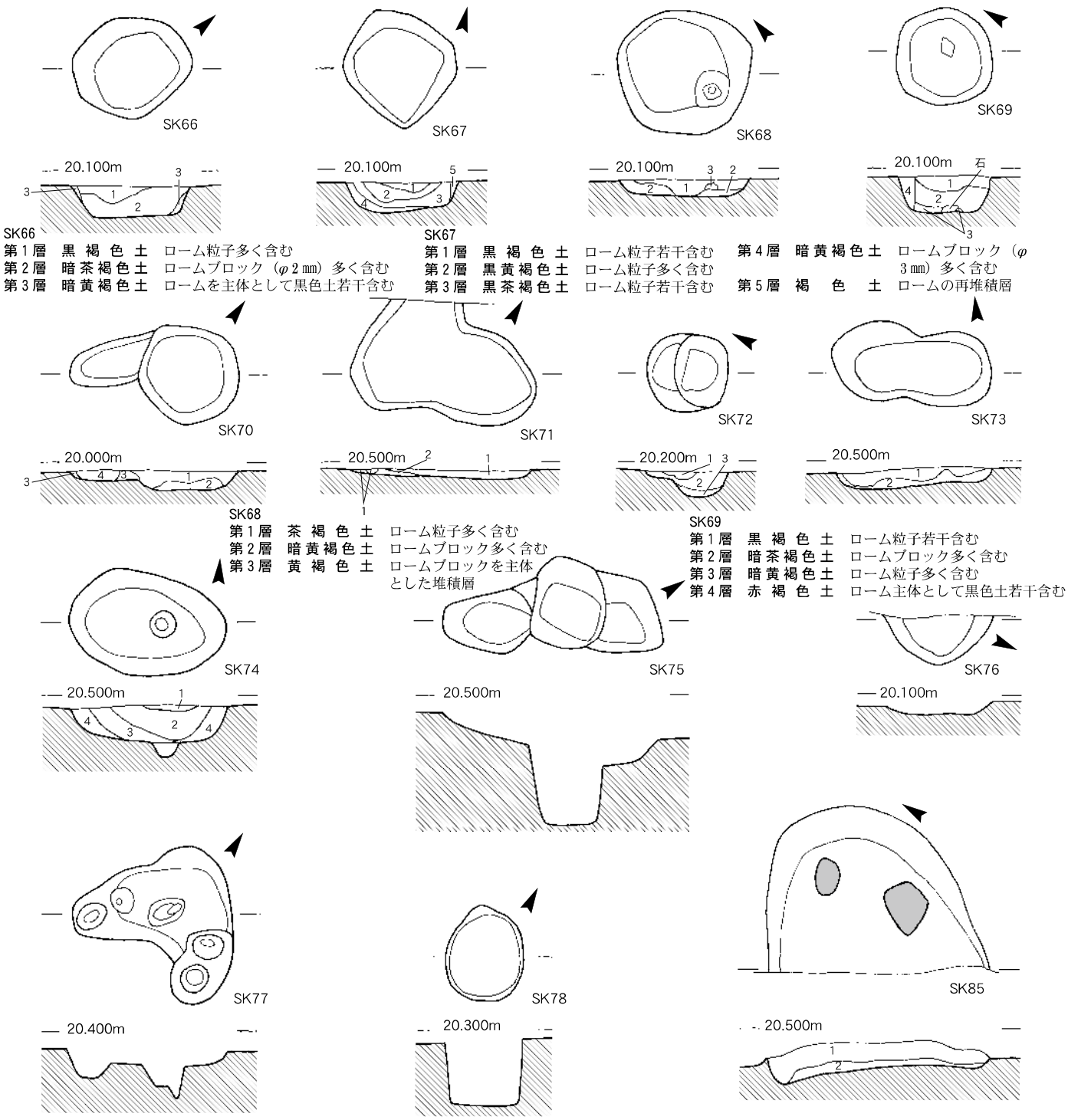
SK51
第１層　茶 褐 色 土　ローム粒子・炭化物少し含む
第２層　暗黄褐色土　ローム粒子・ブロック多く含む

SK54
第１層　暗茶褐色土　ローム粒子多く、ロームブロック（φ80㎜）を若干含む
第２層　黄茶褐色土　ロームの再堆積層、炭化物を若干含む

SK60
第１層　黒 褐 色 土　ローム粒子若干含む
第２層　暗黄褐色土　ロームブロック（φ20㎜）多く含む

SK63、64、65
第１層　褐　色　土　炭化物粒子・ローム粒子若干含む
第２層　茶 褐 色 土　ローム粒子若干含む
第３層　暗茶褐色土　焼土粒子若干含む
第４層　暗黄褐色土　ロームブロック若干含む
第５層　暗 褐 色 土　ローム粒子多量、炭化物粒子若干含む
第６層　黄 褐 色 土　ロームブロック多く含む
第７層　茶 褐 色 土　ローム粒子・炭化物粒子多く含む
第８層　明茶褐色土　ロームブロック若干含む
第９層　黄 褐 色 土　ロームブロック多く含む
第10層　褐　色　土　植痕多い、炭化物粒子若干含む
第11層　黄 褐 色 土　ロームブロック・炭化粒子若干含む

第51図　土坑（３）



SK70
第１層　黒 褐 色 土　ローム粒子多く含む
第２層　暗茶褐色土　ロームブロック（φ２㎜）若干、ローム粒子多く含む
第３層　黄 褐 色 土　ロームを主体とした堆積層
第４層　茶 褐 色 土　ロームを主体として黒色土若干混じる

SK71
第１層　黒 褐 色 土　ローム粒子多く含む
第２層　黄 褐 色 土　ロームを主体として黒色土若干含む

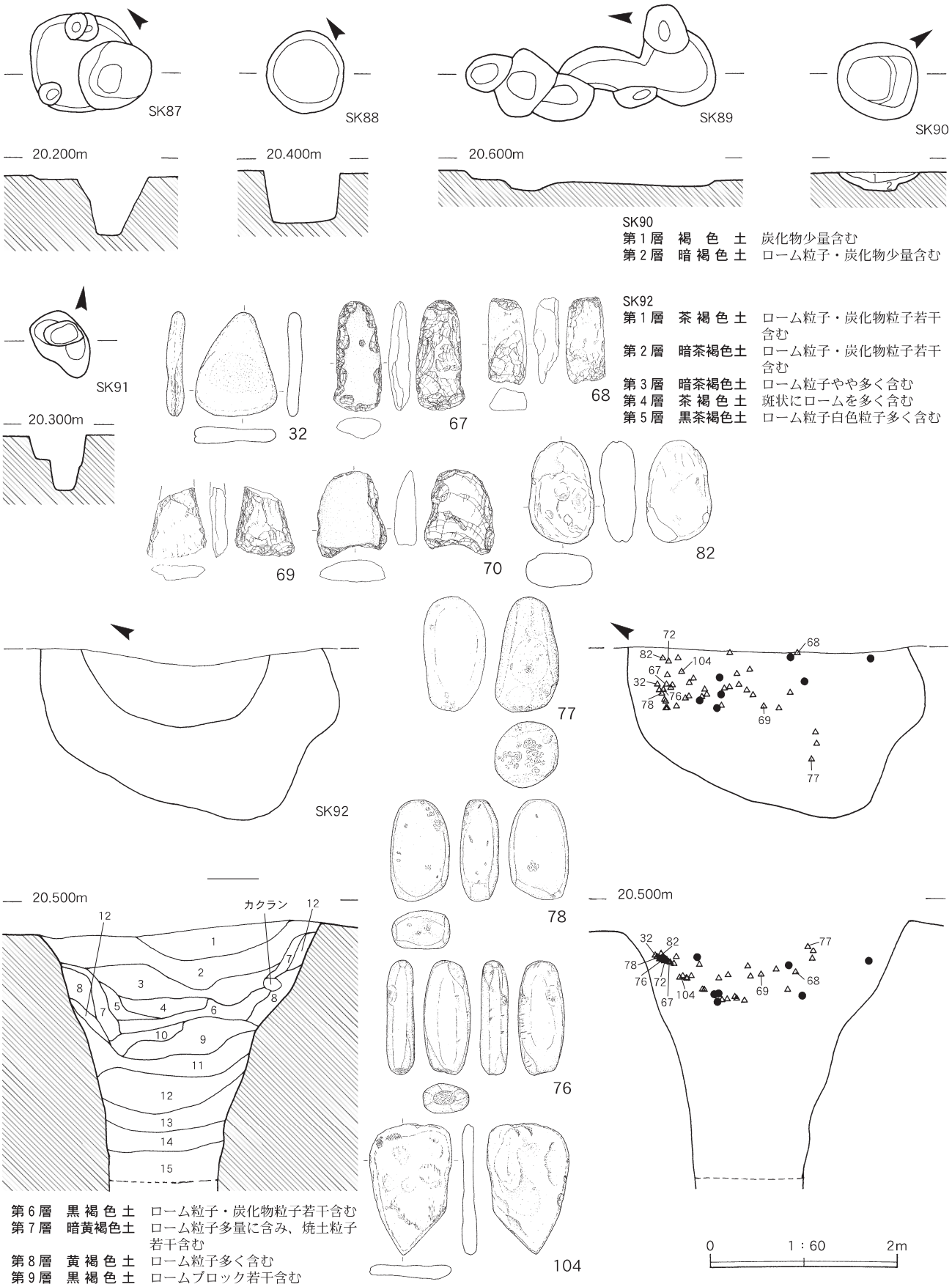
SK72
第１層　黒 褐 色 土　ローム粒子若干含む
第２層　暗黄褐色土　ロームブロック・ローム粒子多く含む
第３層　黄 褐 色 土　ロームを主体とした堆積層

SK73
第１層　明 褐 色 土　ロームブロック多く含む
第２層　茶 褐 色 土　ローム粒子多く含む

SK74
第１層　茶 褐 色 土　ローム粒子・炭化粒子少し含む
第２層　暗茶褐色土　ローム粒子・炭化物粒子わずかに含む
第３層　黄 褐 色 土　ローム粒子を少量含む
第４層　黄 褐 色 土　ローム粒子・ロームブロック多く含む

SK85
第１層　暗 褐 色 土　ローム粒子少量、焼土、炭化物粒子微量含む
第２層　暗黄茶褐色土　ローム多く含む

第52図　土坑（４）



SK90
第１層　褐　色　土　炭化物少量含む
第２層　暗 褐 色 土　ローム粒子・炭化物少量含む

SK92
第１層　茶 褐 色 土　ローム粒子・炭化物粒子若干含む
第２層　暗茶褐色土　ローム粒子・炭化物粒子若干含む
第３層　暗茶褐色土　ローム粒子やや多く含む
第４層　茶 褐 色 土　斑状にロームを多く含む
第５層　黒茶褐色土　ローム粒子白色粒子多く含む

第６層　黒 褐 色 土　ローム粒子・炭化物粒子若干含む
第７層　暗黄褐色土　ローム粒子多量に含み、焼土粒子若干含む
第８層　黄 褐 色 土　ローム粒子多く含む
第９層　黒 褐 色 土　ロームブロック若干含む
第10層　暗黄褐色土　ローム粒子若干含む
第11層　黄 褐 色 土　斑状にロームを多く含む
第12層　暗 褐 色 土　ロームブロック少量含む
第13層　黒 褐 色 土　ローム粒子若干含む
第14層　黒　色　土　ローム粒子若干含む
第15層　暗茶褐色土　ローム粒子少量含む

第53図　土坑（５）

第10表　土坑計測表

遺構名	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	主　軸	形　態
１号土坑	D8	68	54	27	N－64°－W	不整円形
２号土坑	D7	70	62	20	N－64°－W	不整円形
３号土坑	D8	82	46	38	N－75°－W	不整楕円形
４号土坑	D8	128	108	42	N－16°－W	不整楕円形
５号土坑	D8	90	64	20	N－25°－E	不整楕円形
６号土坑	D8	112	54	66	N－31°－E	楕円形
８号土坑	D9	148	100	68	N－57°－W	不整円形
12号土坑	E8	142	108	70	N－18°－E	不整楕円形
13号土坑	E8	138	76	20	N－40°－W	不整楕円形
24号土坑	E9	(104)	90	54	N－１°－E	不整円形
25号土坑	E9	116	54	92	N－39°－W	不整楕円形
26号土坑	E9	(118)	84	68	N－32°－W	不整円形
27号土坑	F9	182	74	76	N－13°－W	不整楕円形
28号土坑	F9	84	46	80	N－59°－E	楕円形
29号土坑	F9	76	58	30	N－10°－W	不整円形
30号土坑	F10	120	88	16	N－47°－W	隅丸方形
31号土坑	E9	72	68	76	N－25°－W	円形
32号土坑	G9	184	108	16	N－１°－E	不整楕円形
33号土坑	G8	(146)	90	10	N－８°－E	不整楕円形
34号土坑	G8	126	96	68	N－45°－E	不整楕円形
35号土坑	F7	90	84	54	N－８°－E	不整円形
38号土坑	E7	80	62	36	N－39°－W	不整円形
39号土坑	C7	260	(138)	12	N－30°－W	隅丸長方形
40号土坑	D7	170	106	32	N－20°－W	不整楕円形
41号土坑	C6	136	96	38	N－43°－W	隅丸楕円形
42号土坑	C7	162	(132)	24	N－29°－E	不整円形
43号土坑	C6	(490)	88	18	N－34°－W	長方形
45号土坑	D6	146	88	50	N－77°－W	楕円形
46号土坑	D5	162	72	32	N－１°－W	不整円形
47号土坑	D4	172	80	42	N－52°－W	不整隅丸長方形
49号土坑	D4	198	86	18	N－83°－E	楕円形
50号土坑	D4	72	66	10	N－79°－W	不整隅丸方形
51号土坑	D3	142	98	18	N－21°－W	楕円形
54号土坑	C4	(390)	236	18	N－12°－W	不整円形
56号土坑	B4	(268)	112	26	N－38°－E	不整隅丸長方形
60号土坑	D3	98	98	30	N－21°－E	不整円形
61号土坑	D3	232	108	16	N－１°－E	不整隅丸長方形
63号土坑	B4	149	136	48	N－28°－W	不整円形
64号土坑	B4	232	126	34	N－28°－W	不整楕円形
65号土坑	B4	122	80	46	N－38°－W	不整楕円形
66号土坑	C3	126	100	32	N－48°－E	不整円形
67号土坑	C2	109	102	32	N－12°－E	不整円形
68号土坑	C2	142	122	16	N－60°－w	不整円形
69号土坑	D2	88	96	38	N－39°－W	不整円形
70号土坑	C1	174	102	10	N－54°－E	不整円形
71号土坑	D1	192	96	8	N－30°－W	不整楕円形
72号土坑	C1	86	76	26	N－29°－W	不整円形
73号土坑	C2	172	68	20	N－74°－W	不整楕円形
74号土坑	D2	164	106	56	N－86°－E	楕円形
75号土坑	C1	224	92	100	N－28°－E	不整楕円形
76号土坑	B4	116	(50)	10	N－61°－E	不整円形
77号土坑	E6	160	150	50	N－31°－W	不整円形
78号土坑	E7	100	82	68	N－29°－W	楕円形
85号土坑	A4	(176)	124	34	N－45°－E	不整楕円形
87号土坑	C5	132	106	64	N－42°－W	不整円形
88号土坑	E4	88	84	54	N－54°－W	円形
89号土坑	D3	270	68	18	N－５°－W	不整楕円形
90号土坑	C5	88	84	20	N－43°－E	不整円形
91号土坑	E7	76	52	60	N－29°－W	不整楕円形
92号土坑	F5	322	(154)	272	N－28°－W	不整円形

35号土坑出土土器（第54図５）

５は沈線による楕円形区画文を横位に連ねた深鉢形土器の胴部片である。区画文内部はRLの単節縄文が施され、モチーフに沿って丁寧に磨り消されている。区画文は横並びで、若干段差を有して施文されており、磨消部を挟んで上部にも文様が展開していることがうかがえる。勝坂Ⅲ式に比定される。

40号土坑出土土器（第54図６・７）

６は口縁部片で、２本隆帯による弧状のモチーフである。地文は撚糸文である。７はLRの単節縄文を地文とし、沈線による蛇行懸垂文と沈線による懸垂文が垂下する胴部片である。加曾利ＥⅠ式である。

42号土坑出土土器（第54図８）

８は深鉢形土器の口縁部片で、平口縁に扇状の突起が配される。隆帯による区画文内は列点が充填され、弧状の区画文には隆帯に沿って爪形文が施される。阿玉台Ⅱ式と想定される。

45号土坑出土土器（第54図９）

９は深鉢形土器の口縁部片である。地文は横位に施される撚糸文である。器面には隆帯の剥離痕が明瞭であり、２本隆帯の主文様が描かれていたと想定される。加曾利ＥⅠ式である。

46号土坑出土土器（第54図10）

10は深鉢形土器の胴部片である。刻みを有する隆帯で区画文を構成する。内部は集合沈線が充填され、隆帯に沿って幅広の爪形文が施される。勝坂Ⅲ式である。

47号土坑出土土器（第54図11～13）

11は隆帯による渦巻文の一部で、深鉢形土器の口縁部である。平口縁で緩く内湾する。加曾利ＥⅠ式である。12は隆帯により楕円形区画文を描出する胴部片である。13は隆帯によって区画文を構成する。内部は尖鋭な施文具による連続した列点で、裏面にも穿たれる。勝坂Ⅲ式である。

62号土坑出土土器（第54図14）

14は連弧文土器の口縁部片である。口唇部直下に交互刺突文が施されている。

63号土坑出土土器（第54図15）

15は深鉢形土器の口唇部に貼付される、加曾利ＥⅠ式の橋状把手であると考えられる。

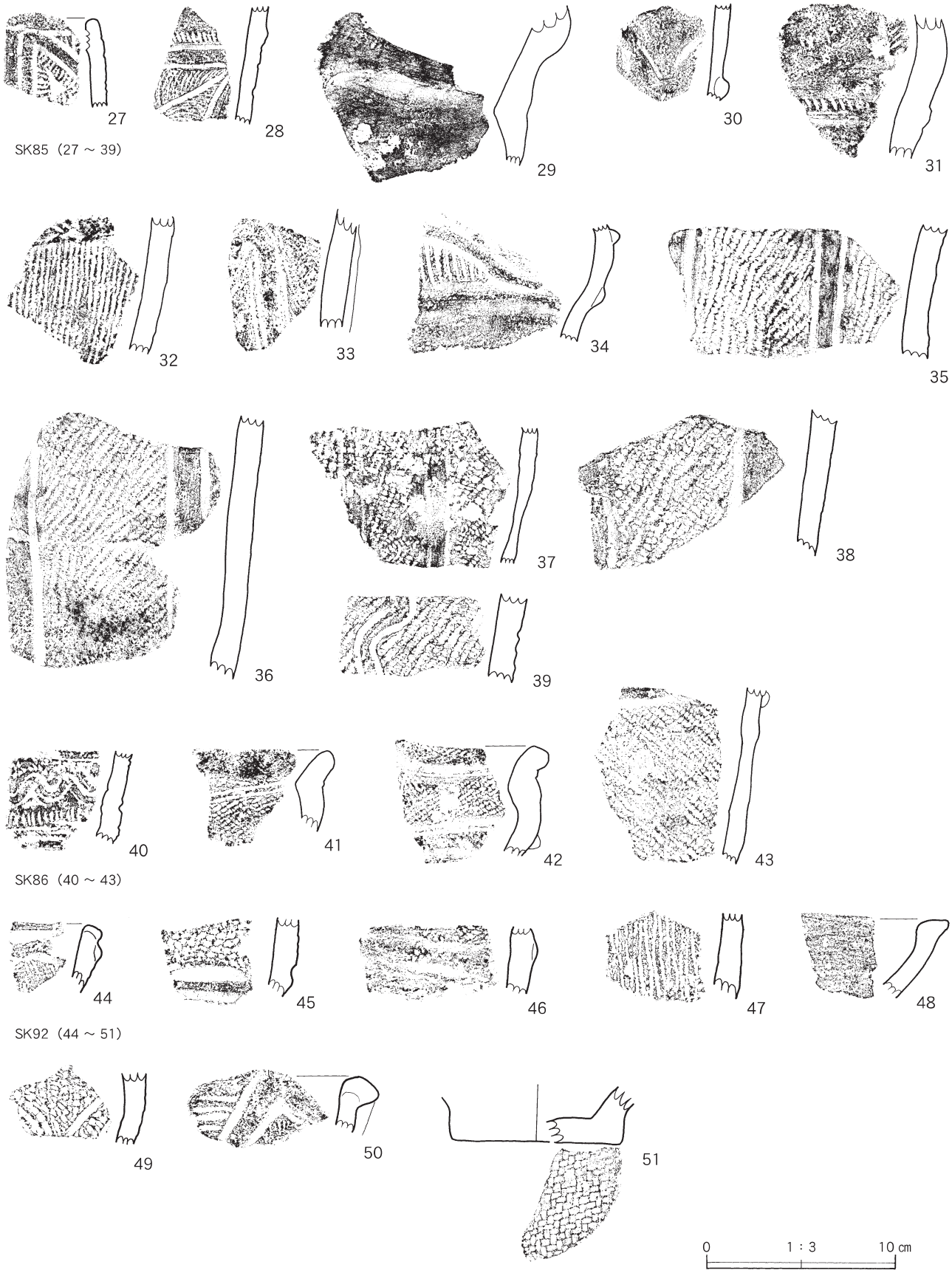
64号土坑出土土器（第54図16・17）

16は阿玉台式期の深鉢形土器である。口縁部が外側に短く張り出す。17は勝坂式土器の胴部片で、区画文内に集合沈線が充填されている。

65号土坑出土土器（第54図18）

18はＳ字状の立ち上がりをもつ深鉢形土器の口縁部片である。平行する２本の隆帯が横位に廻る。下部の隆帯には爪形文が上下に沿って施される。阿玉台Ⅲ式である。

第54図　土坑出土遺物（１）



第55図　土坑出土遺物（２）

68号土坑出土土器（第54図19～24）

19は内面に窪みをもち、周辺に爪形文を施す半円形の突起である。勝坂Ⅲ式である。20は波状口縁を呈する曽利系の深鉢形土器である。縦位の集合沈線が施され、細い隆帯がクランク状に貼付される。21は刻みを有する隆帯による区画文が施される。沈線による三叉文が内部に充填される。勝坂Ⅲ式である。23は口縁部の無文帯直下に円形刺突文が廻り、縦位の撚糸文が施される。22は胴部片で蛇行隆帯の懸垂文である。24は連弧文土器の胴部片で、上下の文様帯を区画する括れ部に小波状のモチーフを描いている。

74号土坑出土土器（第54図25）

25は垂下する隆帯が区画文を描出する。隆帯には刺突列が施される。角押文は隆帯に沿い、ここから派生して蛇行する。阿玉台Ⅱ式と思われる。

77号土坑出土土器（第54図26）

26は直線的に立ち上がる深鉢形土器の口縁部片である。胴部とは沈線により区画され、地文は磨り消される。加曽利ＥⅢ式である。

85号土坑出土土器（第55図27～39）

27、28は区画文内に爪形文を施し、三叉文を描く。勝坂Ⅲ式である。29、30は阿玉台式土器である。29は大型の波状口縁で口縁部が肥厚する。30は胴部片で隆帯による文様が描かれる。31～33は深鉢形土器の胴部片で勝坂式土器である。32は羽状の刻みを有する隆帯が横位に廻る。地文は縦位の撚糸文である。31、32は刻みを有する隆帯により区画文を構成する。33は波状の隆帯文が描かれる。34は頸部無文帯を有する深鉢形土器の口縁部片である。地文に波状の隆帯が横走するモチーフである。加曽利ＥⅠ式である。35～37は深鉢形土器の胴部片である。地文上に平行沈線による懸垂文が描かれ、内部は磨り消される。加曽利ＥⅡ式である。39は蛇行沈線により懸垂文を描く。加曽利ＥⅠ式である。38は懸垂文と地文幅が広く区画され、交互に配される深鉢形土器である。加曽利ＥⅢ式である。

86号土坑出土土器（第55図40～43）

40は爪形文と三角押文に挟まれ小波状の沈線文が施される。41、42は同一個体で、波状口縁を呈する。有節沈線文が方形の区画文を構成している。地文は無節のｒで隆帯上にも施文される。43はRLの単節縄文を地文とし、隆帯を貼付している。これらは阿玉台Ⅳ式である。

92号土坑出土土器（第55図44～51）

44は口縁部下に隆帯が廻り、地文に撚糸文が施される。45、46は深鉢形土器の頸部付近の資料で、無文帯が配される。47は胴部片で地文は撚糸文である。48は無文の浅鉢形土器である。緩く内湾しながら立ち上がり、口縁部は肥厚する。49は連弧文土器の胴部片である。50は隆帯により区画文を描いており、勝坂Ⅲ式である。51は底部片で網代痕を有する。

（３）グリッド出土土器（第56・57図）

ここでは確認面、グリッド及び縄文時代以外の遺構から出土した縄文土器を一括して掲載した。

１～６は刻みを有する隆帯で文様を描く一群である。１は円筒形の深鉢形土器で、隆帯は口唇部から垂下し、途中でモチーフが弧状に分岐する。結節点には突起状の円形貼付文を施す。区画文内は爪形文が卓越するが、一部に三角押文を配する。また沈線で三叉文を施す。２は波状口縁を呈する口縁部片である。口唇直下は肥厚して刻みを施す。胴部の文様帯は刻みを有する弧状の隆帯と沈線を配す。３は内湾する口縁部で、口唇部直下は肥厚して刻みを施す。４は楕円形の区画文が横位に並列する。区画文内は沈線による弧状あるいは渦巻文となる。角押文も施す。５はわずかに外反するが、概ね円筒形を呈する深鉢形土器である。口縁部に施された小波状の隆帯は一部で分岐して懸垂文と変化し、区画文になると想定される。区画内は集合沈線が充填される。６は口縁端が無文帯となり端部が外反する。頸部との区画は刻みを有する平行沈線である。これらは勝坂Ⅲ式土器である。

７は波状を呈する口縁部片で、口唇部が肥厚して沈線を施す。波端部には渦巻文を描く。加曾利ＥⅠ式である。

８は横位の刻みを有する隆帯から、弧状の隆帯が派生して区画文を描く。９は円筒形を呈する深鉢形土器の底部付近の資料で、縦位のパネル文を施す。底部文様帯は無文である。10、11は地文に縄文を施し、横位に隆帯が展開する。いずれも隆帯上には刻みを有する。10は綾杉状である。

12は沈線による区画文内に蓮華文や綾杉状の集合沈線を施す。13は弧状の隆帯に沿って爪形文を施す。勝坂Ⅱ式である。14は区画文内に集合沈線を充填する。

15は弧状の平行沈線内に刻みを施す。区画文内は撚糸文である。16は半肉彫状で三叉文を描く。

17は弧状の隆帯に沿って１列の角押文を施す。18は阿玉台Ⅰｂ式の胴部片で刻目文である。

19は褶曲する隆帯に沿って２列の角押文を施す。20は刻みを有する口唇部直下に２列の角押文を弧状のモチーフとして描く。21は緩い波状口縁を呈する。口縁部の隆帯は断面が三角形である。22は平縁で口唇部は外側に突出する。直下には三角押文を横位に施し、平行する有節沈線が斜状に描かれる。23・24は口縁部が外側へ外反しながら突出し、内側は稜を有する。25は波状の口縁部で、角押文により鋸歯状と直線状のモチーフが横位に展開する。これらは阿玉台Ⅱ式である。

26～28は複列の角押文を施す。26は隆帯に沿い、27はモチーフとして描いている。28は断面が三角形の隆帯に沿って角押文を施し、途中で分岐して垂下する。

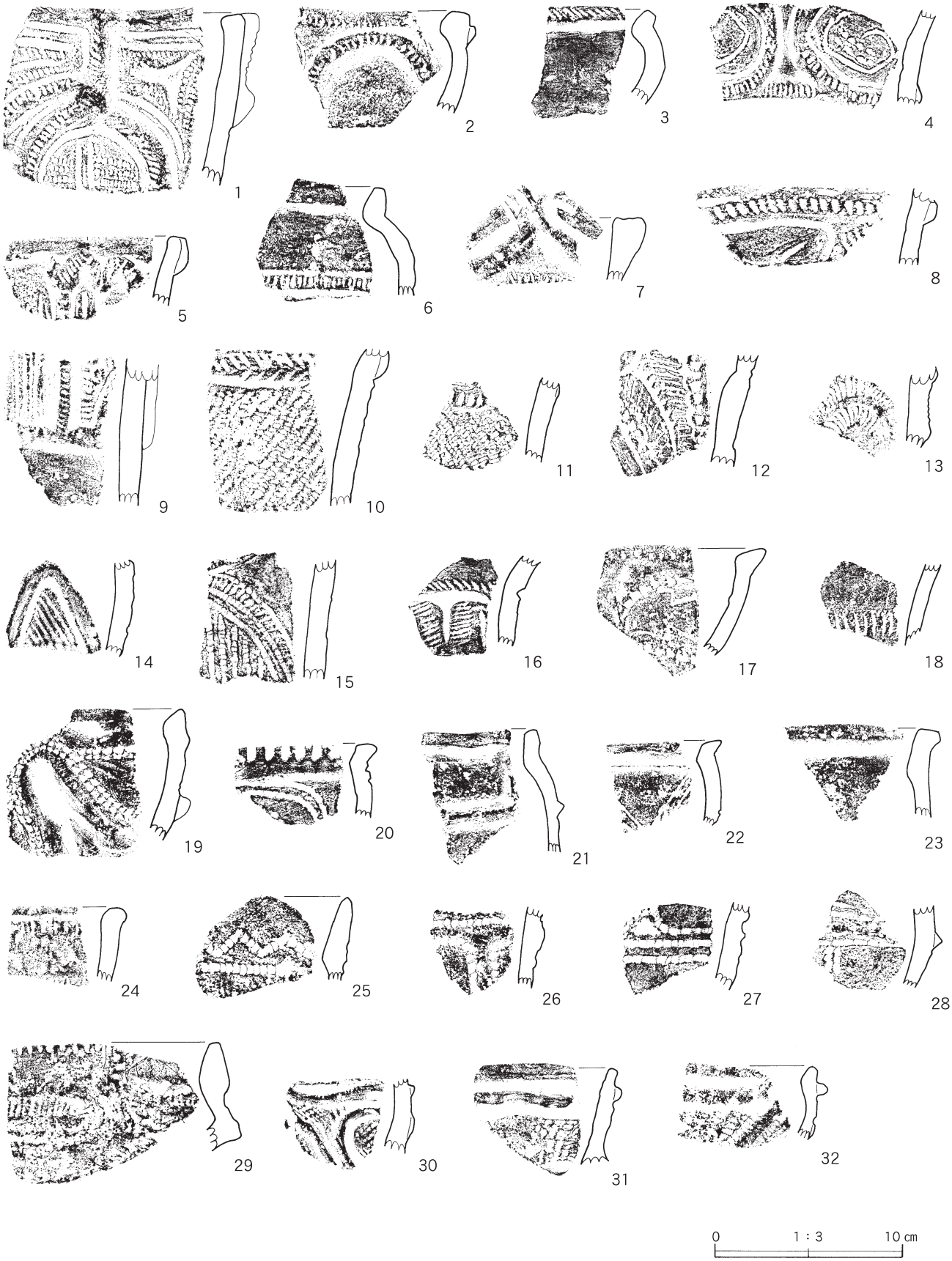
29は隆帯により区画された横位の楕円形区画文が展開する。区画内は爪形文が隆帯に沿って施す。口縁は平縁気味であるがやや波状を呈し、波頂部は扇状に広がり口唇部に刻みを有する。阿玉台Ⅲ式である。

30は地文が単節縄文である。断面が三角形の隆帯により区画文が施される。隆帯には沈線が沿う。阿玉台Ⅳ式であろう。

31は外反気味に立ち上がる口縁部片である。地文はRLの単節縄文であるが施文が粗い。32は口唇部が肥厚し、２本の沈線が廻る。33は口縁部文様帯が平行する隆帯で区画しており、地文は撚糸文である。また縦位の短い隆帯が文様帯を区画する。34は地文に撚糸文が施され、２本隆帯が貼付される。これらは加曾利ＥⅠ式である。

35は沈線による楕円形区画文が描かれる。

36は頸部から胴部の資料である。頸部は無文帯で、２本の太い隆帯により胴部と区画する。地文は縦位の撚糸文である。37は口縁部から頸部の破片である。幅広の隆帯により口縁部と頸部無文帯を区画する。38は頸部無文帯が２本の隆帯により区画されている。39は幅広の撚糸文に蛇行隆帯が懸垂文として貼付される。



第56図　グリッド出土土器（１）

40は半裁竹管による蛇行沈線文である。41は平行する２本隆帯の懸垂文である。42は半肉彫状で垂下する懸垂文である。43は横位に転がされた撚糸文上に３本の沈線により懸垂文を描く。44、45は沈線による懸垂文で、沈線間の地文は磨り消されている。

46は口縁部が外屈し、無文帯となっている。屈曲部には平行沈線が施される。

47～51は連弧文土器である。47は口縁部片でやや内湾しながら立ち上がる。口唇直下は平行する沈線が廻る。48、49は口縁部に交互刺突文が廻る。50は地文が条線である。51は胴部を二分する横位の沈線である。

52、53は浅鉢形土器である。52は口縁部が丸く肥厚して大きく内湾する。53は太い沈線が廻り、胴部の立ち上がりは直線状である。

54、55は堀之内式の粗製土器である。54は内側に沈線が廻って屈曲する。表面の地文はLRの単節縄文である。55は浅い沈線による縦位の文様を描く。

56は加曾利ＢⅠ式の粗製土器で、口唇部直下に紐線文が廻る。

（４）石器（第58～67図、第11表）

ここで報告する石器は第１次から４次調査に関わる資料で、石器と分類したものは、ほぼ全点を掲載した。石器実測図の掲載にあたり、石鏃、スクレーパー類については2/3縮尺とし、器種別に分類して掲載した。また、打製石器、磨石などは1/3縮尺とし、遺構ごとあるいは層位ごとに掲載した。第１次～第４次の発掘調査によって得られた石器や破片などの総重量は、約292kgであった。なお、器種、大きさ、重量、石質、出土位置（遺構・グリッド）などの情報については第11表に示した。また、各石器の表裏については、剥片を用いた石器では主要剥離面を裏面とし、自然面を残す方を表面として認識したが、判断の困難な例は任意に配置している。また、いわゆる石核石器は安定性などを考慮して作図しており、表裏の判断が困難な例も多い。ここでは便宜的に向かって左側を表面、右側を裏面とする。

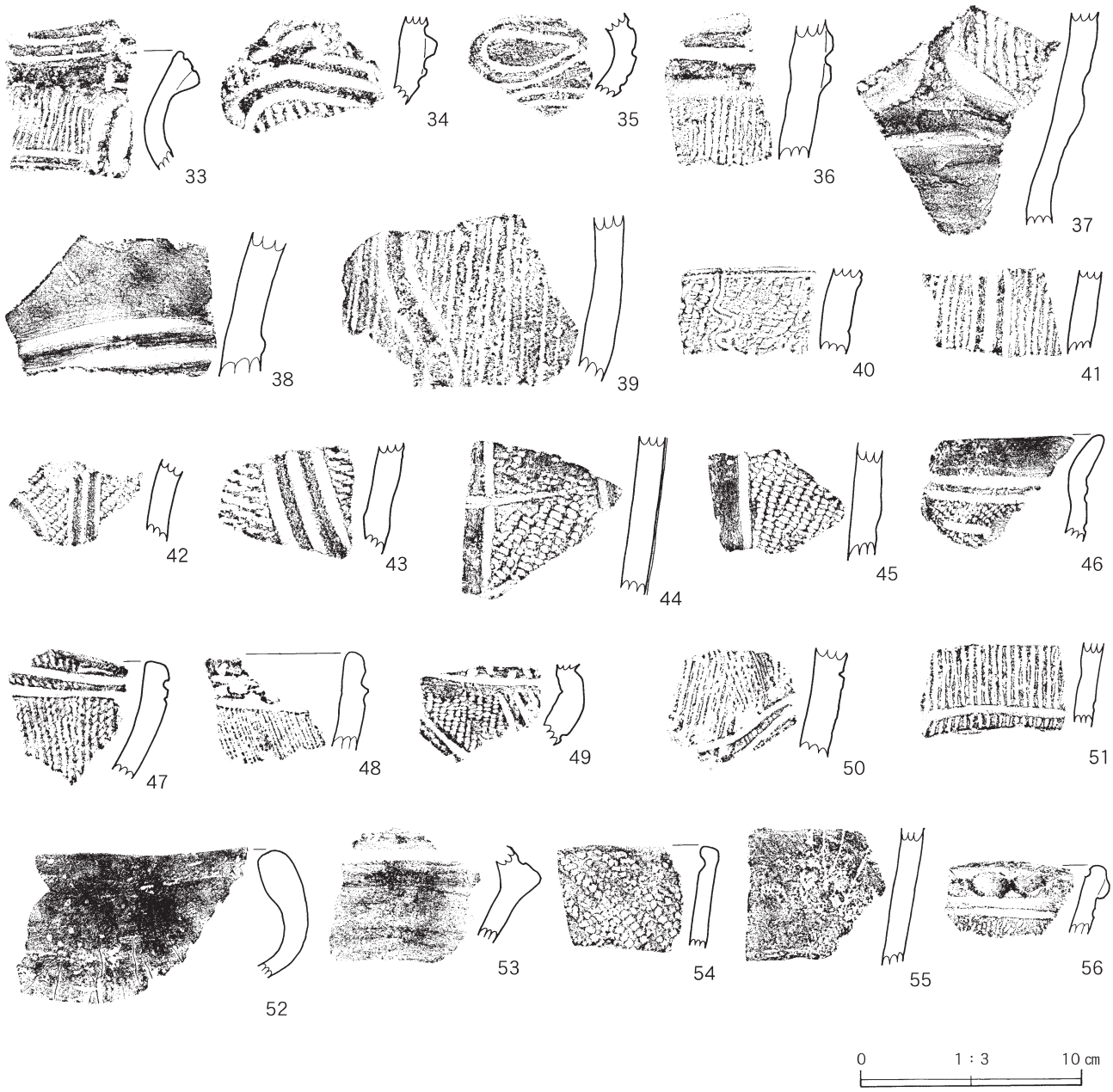
第１次調査において検出された石器類の総量は約57kgであり、その資料から利器等を抽出し、131点を第58～67図に図示した。本調査区は台地上の集落跡部分であり、石器の多くは住居跡、土坑等の遺構の覆土から出土したものであるが、92号土坑の覆土上部では多くの石器が廃棄された状況であり、その出土状況が注意される。第61図67～65図111である。

１は上半が欠損した尖頭器であり、石材の黒曜石には球形の不純物を含む。23は押圧剥片で、尖頭器の調整剥片と考えられる。２～８は石鏃で、いずれも先端部、翼部の一部が欠損しており、完形品はない。４は59号、６は53号土坑覆土からの出土で、これらの中ではやや大型である。３は表裏に主要剥離面を残し、７は裏面の大部分に主要剥離面を残す。

９～25は様々な石材を用いた剥片で、９～15、17は縦長剥片が素材であるが、12はバルブ部分が欠損し、12、13以外は一部に微細な剥離痕や調整剥離が認められ、使用痕跡のある剥片とした。調整剥離が施された９～11、21や使用のために微細な剥離痕が残された15、18、24等がある。14には下端部に小さいがノッチ状の窪みが認められる。25は一部に自然面を有し、球形の大きな不純物が包含され、側縁にわずかな剥離痕が認められる剥片である。

26～30、32は１号住居跡覆土の出土資料である。26～30は打製石斧としたが、29以外は欠損品である。27､30は棒状の礫を素材とし、いずれも下半部が欠損している。29は丁寧な調整剥離が施され、スクレーパー的な機能も予想される。なお、30は頭部に若干の剥離痕があり、成形の意図がうかがえ、欠損後も使用されたものと想定される。32は石皿の破片であり、裏面に小さい凹みが認められる。

31、33～37は４号住居跡覆土からの出土で、31、33、34は打製石斧であり、いずれも欠損品である。35、



第57図　グリッド出土土器（２）

36は棒状の礫を素材としたもので、両端部に剥離が認められることから敲き石とした。一部に研磨痕も認められ、磨石としての使用も考えられる。37は凹石であるが、側縁部には敲打痕と思われる痕跡が認められる。

38～40、42は５号住居跡の覆土出土で、39は縁辺の一部に小剥離痕が認められることからスクレーパーと分類した。38は剥片である。42は石皿の大型の破片で、裏面中央部に小さな凹みが存在する。

41、43は６号住居跡の覆土から出土した遺物で、棒状の礫を素材としたものである。41は磨石、43は頭部にも剥離痕があり、敲き石としたが、縦断面形態から打製石斧的な利用も考えられる。

44～47、49は７号住居跡の出土資料である。44～46は打製石斧に分類したが、44は欠損品と考えられ、破断後にスクレーパー的な機能を有する石器とした可能性がある。45は横長剥片を素材とするが、周辺調整剥離が粗雑な印象を受けるので、未成品ないし刃部欠損品の再生の可能性も考えられる。47、49は扁平な棒状の礫を素材とした磨石としたが、49は研磨痕が認められ、一部に成形のための剥離があり、磨製石斧への傾

斜が感じられるが確証はない。

48、50～62は８号住居跡出土資料である。48は主に表面が自然面の縦長剥片を素材とした剥片であるが、わずかに下端に調整剥離痕が認められることからスクレーパーとした。50～61は打製石斧であろう。50は刃部の一部が欠損し、51、57、58は完形品と思われるが、59は扁平な棒状の礫を素材としており、刃部が欠損し、再生した可能性が高い。52は下半を欠損するが、表面先端の剥離痕は再利用している可能性が考えられる。54もその形態から刃部を再生した可能性が高い。56は分類に苦慮するが、ここでは打製石斧としておく。61は一見分銅形石斧にみえるが、側縁の抉りは頭部のつまみ部の成形を意図していると考えた。また、刃部には磨滅痕が顕著である。62は風化が著しいが、前面に敲打痕、側面に研磨痕が認められるので、磨製石斧の頭部とした。

63～66は９号住居跡出土資料である。64、65は打製石斧で、64は刃部に磨滅痕が認められる。63はスクレーパー、66は磨石とした。加熱によると思われる剥落が認められる。67～111に図示した44点は92号土坑より出土した資料である。

67～70、74は打製石斧と分類したが、70は素材の形状を大きく変更するような剥離調整が認められない。また、71と72は大きさが異なるが、ほぼ相似形で自然面を有する分厚い剥片を素材とし、下端部が緩いノッチ状である点で同様であろう。器種は不明である。68は棒状の礫を素材としており、８号住居跡の59と同様な製作手法である。74は寸詰りであり、下半部が欠損した後の再生かもしれない。73、75～81、83～100、102～105、109は形状的には様々であるが、磨石ないし敲打器であろう。75は断面に磨滅痕が認められ、スタンプ形石器のような下端の平坦部が機能面と考えられる。73、76～88、104、105はやや幅広の素材を用いているが、76～81は両端部に敲打痕を有する。83～88は破損品である。86～100、102、103は棒状の礫を素材としている。91は研磨部に稜が観察され、砥石とした方が妥当であろう。101は裏面中央上部に浅い凹みが認められ、凹石に分類した。

106～108、110、111は、断面形態はほぼ扁平であるが、石皿と考えた。

112～123は10、27、56、64、85、86号土坑からの出土品である。118はいわゆる撥形の打製石斧の欠損品と考えられる。112は凹石、113～117は打製石斧に分類したが、113以外はいずれも欠損品である。113は形状的には打製石斧とするのにやや躊躇する。119、120、122はその石質から石皿の転用品と思われ、119、122はロート状の凹みから多孔石の破片であろう。120は小さな凹みであり、121はやや大きいが中央部に浅い凹みがわずかに確認されるので凹石と分類した。123は丁寧な調整剥離により円形に成形されているのでスクレーパーとした。

124～128は中世の遺構より出土している。124は原石の礫を半裁した横長剥片を素材とした打製石斧で、調整剥離はやや粗雑である。125は棒状の扁平な礫を素材としており、刃部先端が欠損した例であるが、使用による磨滅痕が著しい打製石斧と考えられる。126はスクレーパー、127は敲打器である。

128～131はグリッド出土及び表面採集資料である。128、129は打製石斧である。131は磨石、130は断面形態から磨製石斧の欠損品とした。

第58図　石器（１）

第59図　石器（２）

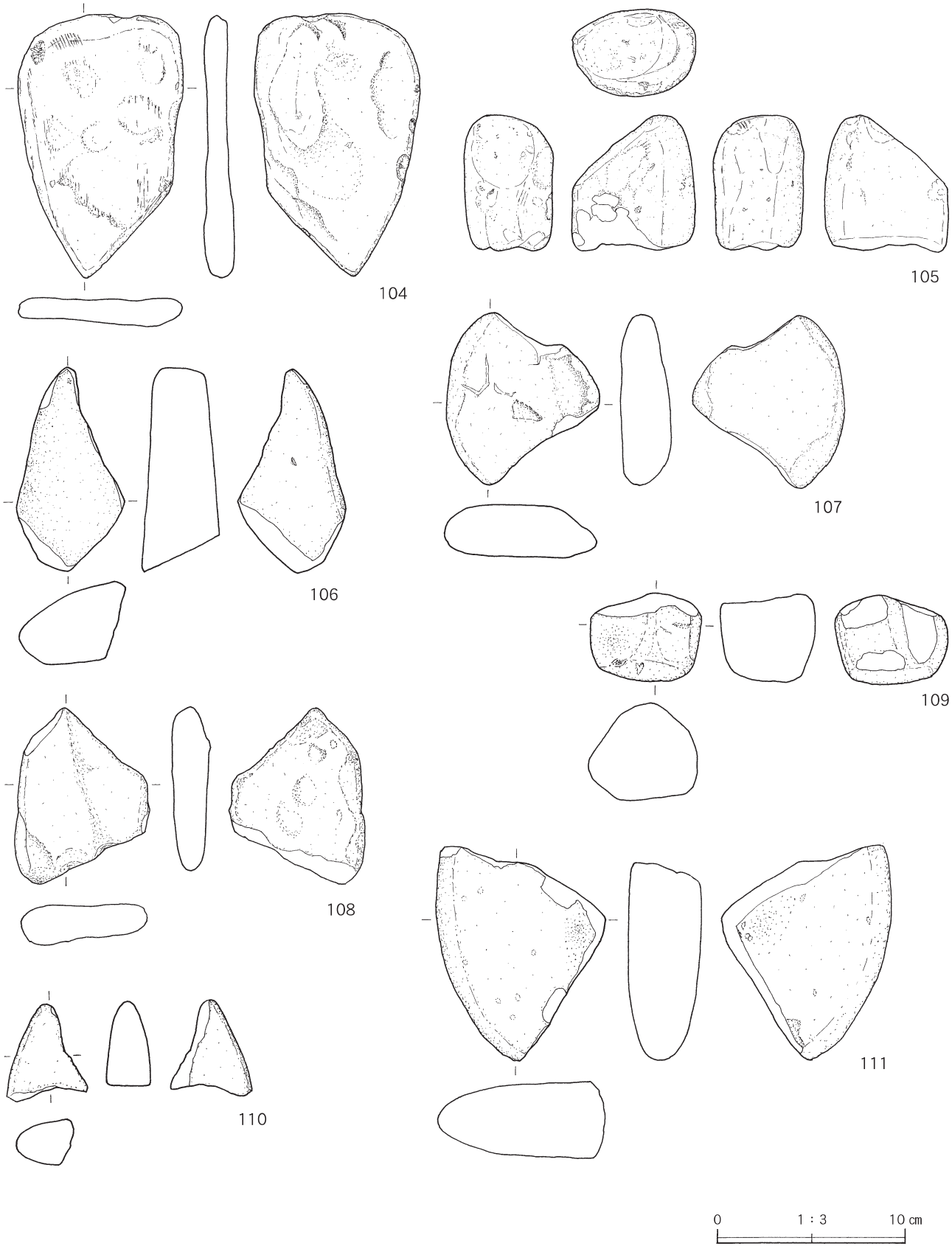
第60図　石器（３）

第61図　石器（４）

第62図　石器（５）

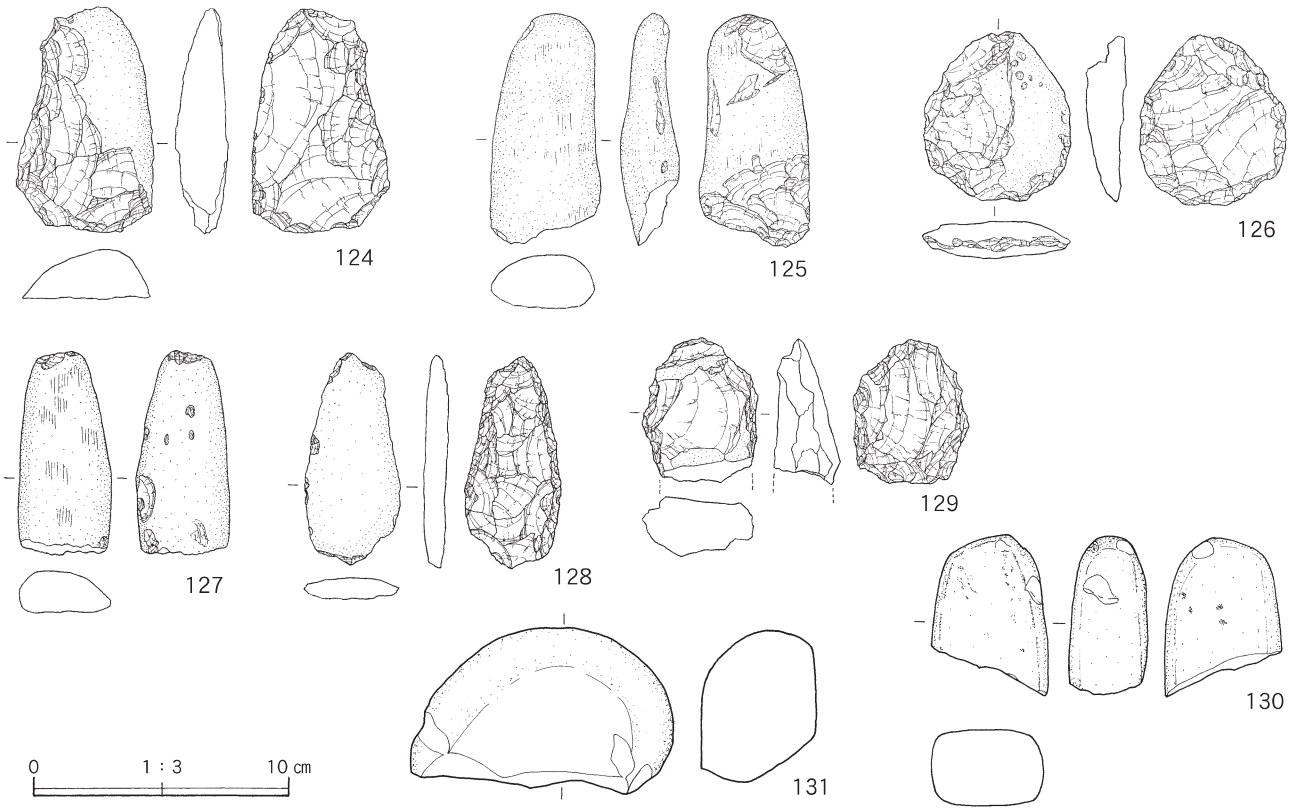
第63図　石器（６）

第64図　石器（７）



第65図　石器（８）

第66図　石器（９）

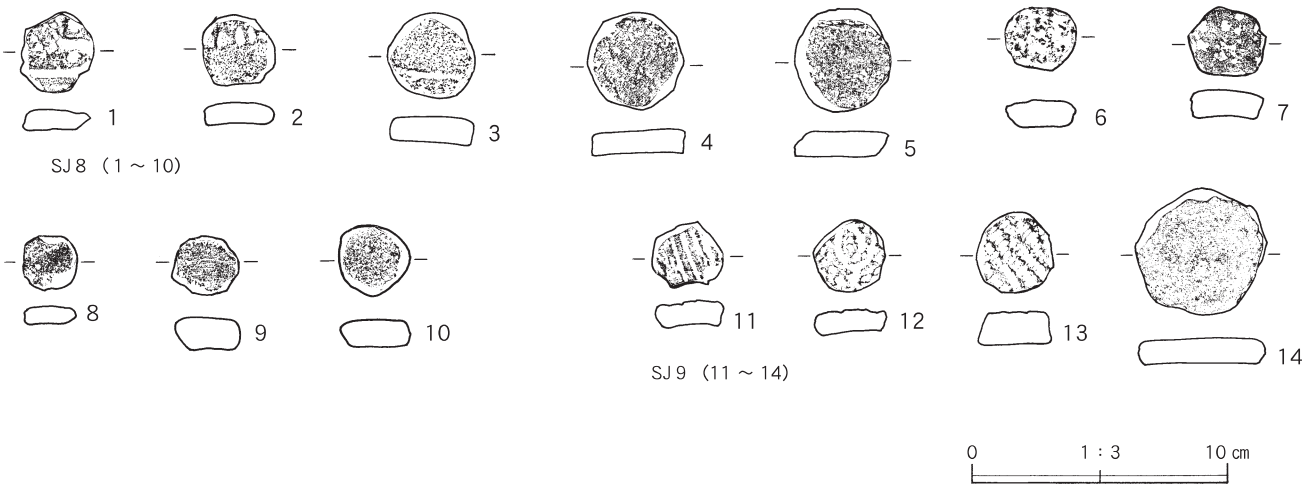


第67図　石器（10）

第11表　第１次調査出土石器観察表

No.	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	遺構・グリッド	注記No.	備　考
1	尖頭器	3.4	2.0	0.7	3.9	黒曜石	SJ7	52	刃部破損
2	石鏃	2.4	1.8	0.3	1.0	チャート	SJ1	147	
3	石鏃	2.5	1.4	0.35	1.1	頁岩	SJ1	155	
4	石鏃	2.4	2.1	0.4	1.2	チャート	SK59		
5	石鏃	1.9	1.5	0.3	0.8	チャート	SJ8	1023	
6	石鏃	3.2	2.1	0.4	1.8	チャート	SK53		
7	石鏃	1.4	1.4	0.3	0.3	黒曜石	SK77		
8	石鏃	1.0	2.0	0.2	0.3	黒曜石	SJ4	33	
9	剥片	3.6	2.2	0.4	3.5	硬質頁岩	SJ7	68	
10	剥片	3.6	1.8	0.4	2.3	硬質頁岩	SJ7	325	使用痕あり
11	剥片	2.7	2.2	0.4	1.6	硬質頁岩	SJ7	455	使用痕あり
12	剥片	2.9	1.7	0.3	1.8	硬質頁岩	SJ7	69	
13	剥片	3.5	1.6	0.3	1.1	硬質頁岩	SJ7	457	
14	剥片	3.0	1.5	1.1	1.6	黒曜石	SJ8	929	使用痕あり
15	剥片	3.2	1.7	0.5	1.7	硬質頁岩	SJ7	236	使用痕あり
16	剥片	2.7	2.0	0.9	3.8	黒曜石	SJ8	55	使用痕あり
17	剥片	3.5	1.5	0.4	1.9	黒曜石	SJ8		使用痕あり
18	剥片	2.1	2.2	0.4	2.1	黒曜石	SJ7		使用痕あり
19	剥片	2.9	2.9	0.5	2.7	硬質頁岩	SJ7	95	使用痕あり
20	剥片	3.1	2.5	1.2	8.7	黒曜石	SJ9	31	使用痕あり
21	剥片	3.8	2.8	1.5	17.3	チャート	SJ6	45	使用痕あり
22	剥片	2.3	3.6	0.9	4.8	凝灰岩	SJ1	25	使用痕あり
23	剥片	1.3	2.4	0.3	0.6	頁岩	SJ8	489	使用痕あり
24	剥片	2.9	3.2	1.3	7.4	チャート	SJ5	19	使用痕あり
25	剥片	3.7	2.6	2.1	6.9	黒曜石	SK59		
26	打製石斧	9.1	4.9	3.1	139.9	泥岩	SJ1	193	
27	打製石斧	9.6	3.8	2.6	99.3	石墨片岩	SJ1	73	
28	打製石斧	7.7	6.1	1.4	69.8	フォルンフェルス	SJ1	151	
29	打製石斧	7.1	5.3	1.4	65.4	フォルンフェルス	SJ1	77	スクレーパー的機能あり
30	打製石斧	8.7	6.2	3.0	194.1	砂岩	SJ1	93	欠損後再利用
31	打製石斧	8.0	5.2	1.1	97.1	閃緑岩	SJ4	120	
32	石皿	11.3	10.3	4.96	790.0	砂岩	SJ1		
33	打製石斧	9.2	6.4	3.3	138.6	フォルンフェルス	SJ4	228	
34	打製石斧	6.0	4.6	3.1	112.6	フォルンフェルス	SJ4	361	
35	敲石	9.9	4.4	3.9	190.6	砂岩	SJ4	8	
36	敲石	15.0	4.3	2.9	275.1	緑色岩	SJ4	359	
37	凹石	8.6	7.6	3.7	361.9	安山岩	SJ4	380	
38	剥片	5.8	5.3	1.8	54.8	フォルンフェルス	SJ5	36	
39	スクレーパー	3.5	7.0	1.6	45.1	チャート	SJ5	64	
40	凹石	6.3	6.5	3.2	165.0	閃緑岩	SJ5		
41	磨石	8.9	4.2	3.4	235.2	緑色岩	SJ6	32	
42	石皿	24.7	12.6	3.9	1700.0	雲母片岩	SJ5	76	
43	敲石	14.8	4.5	2.6	265.7	緑色岩	SJ6	49	打製石斧的利用か
44	打製石斧	6.9	7.9	3.0	199.7	砂岩	SJ7	278	
45	打製石斧	6.7	5.2	2.0	87.1	凝灰岩	SJ7	466	未成品の可能性あり
46	打製石斧	7.3	4.3	1.9	67.3	フォルンフェルス	SJ7		
47	磨石	6.2	4.3	2.0	76.5	砂岩	SJ7	179	
48	スクレーパー	7.6	4.4	0.8	25.4	フォルンフェルス	SJ8	420	
49	磨石	8.0	4.1	2.5	147.1	砂岩	SJ7		
50	打製石斧	13.6	5.4	2.7	224.3	礫岩	SJ8	531	
51	打製石斧	9.0	4.6	2.3	122.7	砂岩	SJ8	1047	
52	打製石斧	8.9	4.7	1.9	135.8	緑色岩	SJ8	40	
53	打製石斧	6.2	5.0	1.9	72.6	フォルンフェルス	SJ8	900	
54	打製石斧	8.8	6.8	2.8	221.5	凝灰質砂岩	SJ8	931	
55	打製石斧	5.7	6.7	2.4	91.7	砂岩	SJ8	479	
56	打製石斧	9.8	2.9	2.3	77.4	緑色岩	SJ8	1025	
57	打製石斧	8.6	3.6	2.2	59.7	フォルンフェルス	SJ8	255	
58	打製石斧	9.2	4.0	2.4	89.0	泥岩	SJ8	927	
59	打製石斧	9.6	3.9	1.6	95.3	変成岩	SJ8	414	欠損後再利用
60	打製石斧	11.3	2.1	2.2	101.8	緑色岩	SJ8	896	
61	打製石斧	6.6	5.6	1.0	43.1	形質頁岩	SJ8	545	
62	磨製石斧	4.5	4.1	2.8	74.0	緑色岩	SJ8	1007	
63	スクレーパー	7.3	6.1	1.2	60.4	フォルンフェルス	SJ9	257	
64	打製石斧	9.5	2.6	1.3	50.6	緑色岩	SJ9	250	

No.	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	遺構・グリッド	注記No.	備　考
65	打製石斧	7.4	4.7	1.7	76.4	緑色岩	SJ9	158	
66	磨石	7.5	7.0	5.6	374.5	閃緑岩	SJ9		
67	打製石斧	11.6	5.2	2.3	172.9	フォルンフェルス	SK92	18	
68	打製石斧	9.1	4.1	2.7	134.5	緑色岩	SK92	126	
69	打製石斧	7.4	6.4	1.7	91.1	フォルンフェルス	SK92	52	
70	打製石斧	16.8	10.3	5.4	1200.0	泥岩	SK92	37	
71	不明	10.8	8.4	4.5	379.6	頁岩	SK92	29	
72	不明	9.1	7.2	2.4	197.7	緑色岩	SK92	3	
73	磨石	11.0	8.8	1.8	217.1	砂岩	SK92	12	
74	打製石斧	8.3	6.5	3.0	166.7	砂岩	SK92	52	欠損後再利用
75	磨石・敲打器	6.0	4.8	3.3	151.3	緑色岩	SK92	123	
76	磨石・敲打器	12.2	5.0	3.0	292.4	砂岩	SK92	8	
77	磨石・敲打器	12.2	6.8	6.7	765.0	安山岩	SK92	89	
78	磨石・敲打器	10.8	6.3	4.1	440.2	安山岩	SK92	25	
79	磨石・敲打器	12.0	6.7	3.4	390.5	砂岩	SK92	87	
80	磨石・敲打器	12.1	6.0	2.4	266.9	石英片岩	SK92	31	
81	磨石・敲打器	12.8	6.3	2.4	225.0	凝灰岩	SK92	108	
82	凹石	11.0	7.2	3.8	449.4	チャート	SK92	5	
83	磨石・敲打器	5.4	7.9	3.9	225.1	閃緑岩	SK92	19	
84	磨石・敲打器	3.7	7.1	3.8	165.6	安山岩	SK92	23	
85	磨石・敲打器	8.1	5.4	3.4	221.6	閃緑岩	SK92	130	
86	磨石・敲打器	10.1	4.1	2.2	141.6	砂岩	SK92	97	
87	磨石・敲打器	7.5	5.5	2.3	133.4	砂岩	SK92		
88	磨石・敲打器	7.3	6.3	4.2	326.2	安山岩	SK92	112	
89	磨石・敲打器	9.4	5.7	3.8	262.9	砂岩	SK92	77	
90	磨石・敲打器	7.0	3.8	4.3	134.1	砂岩	SK92	1	
91	磨石・敲打器	17.1	3.5	3.1	288.3	石英片岩	SK92	26	砥石の可能性あり
92	磨石・敲打器	11.2	4.7	2.8	223.1	砂岩	SK92	70	
93	磨石・敲打器	12.0	4.3	3.5	244.5	フォルンフェルス	SK92	72	
94	磨石・敲打器	11.2	3.8	2.7	169.8	礫岩	SK92	99	
95	磨石・敲打器	13.8	6.0	3.7	437.9	砂岩	SK92	86	
96	磨石・敲打器	10.5	4.5	3.6	214.8	礫岩	SK92	54	
99	磨石・敲打器	14.0	4.1	3.1	159.7	緑色岩	SK92	62	
100	磨石・敲打器	12.8	4.6	2.3	169.6	緑色岩	SK92	33	
101	凹石	10.4	4.3	3.2	233.8	緑色岩	SK92	14	
102	磨石・敲打器	10.6	4.5	3.4	207.8	砂岩	SK92	30	
103	磨石・敲打器	17.3	6.9	3.2	501.9	閃緑岩	SK92		
104	磨石・敲打器	14.0	8.9	1.6	314.1	緑泥片岩	SK92		
105	磨石・敲打器	7.2	6.7	4.8	283.6	安山岩	SK92	32	
106	石皿	10.8	5.6	4.14	256.3	砂岩	SK92	60	
107	石皿	9.2	8.2	2.7	250.6	閃緑岩	SK92	116	
108	石皿	8.6	6.8	2.0	191.4	緑泥片岩	SK92	44	
109	磨石・敲打器	4.8	5.9	4.1	205.5	礫岩	SK92	117	
110	石皿	5.0	3.0	2.3	44.9	緑色岩	SK92	73	
111	石皿	11.5	9.0	3.9	550.0	安山岩	SK92	24	
112	凹石	7.6	4.15	4.8	226.3	安山岩	SK10	2	
113	打製石斧	6.0	7.9	2.8	158.5	フォルンフェルス	SK27		
114	打製石斧	5.1	5.7	1.4	49.0	フォルンフェルス	SK56		
115	打製石斧	6.3	5.6	2.1	101.4	フォルンフェルス	SK64		
116	打製石斧	8.3	5.7	2.9	119.1	フォルンフェルス	SK64	4	
117	打製石斧	7.0	4.7	2.1	86.1	フォルンフェルス	SK85	20	
118	打製石斧	8.0	6.5	2.5	122.0	砂岩	SK85		
119	多孔石	16.2	8.7	2.2	412.6	緑泥片岩	SK85		石皿の転用品
120	凹石	16.7	9.3	1.8	367.5	緑泥片岩	SK85	14	石皿の転用品
121	凹石	10.6	6.5	5.36	491.4	安山岩	SK85		
122	多孔石	11.8	8.5	4.0	350.0	絹雲母片岩	SK85	13	石皿の転用品
123	スクレーパー	5.9	5.8	1.6	63.3	フォルンフェルス	SK86		
124	打製石斧	8.8	5.5	2.1	107.2	フォルンフェルス	ST2	146	
125	打製石斧	9.1	4.4	2.3	110.3	泥岩	ST2	154	
126	スクレーパー	6.7	5.9	1.5	69.1	フォルンフェルス	ST2	181	
127	敲打石	8.0	3.6	1.7	83.7	泥岩	ST2	95	
128	打製石斧	8.3	3.8	0.9	35.2	砂岩	ST2		
129	打製石斧	5.7	4.6	2.2	73.2	黒色頁岩	C2グリッド		
130	磨製石斧	6.3	4.6	3.1	118.7	砂岩	B4グリッド		
131	磨石	7.3	10.5	4.6	382.0	花崗岩	E10グリッド		



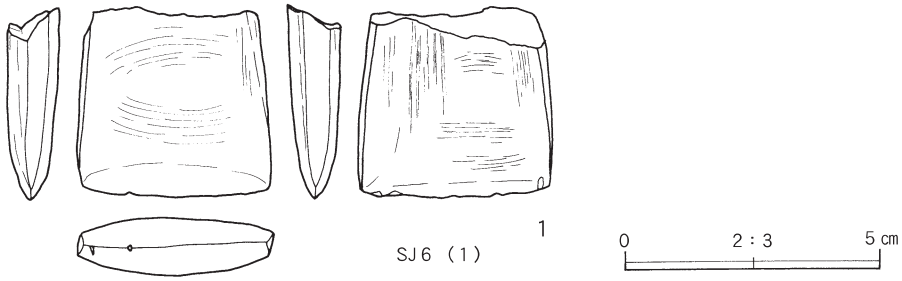
第68図　土製品

（５）土製品（第68図、第12表）

１～14は土製円板である。図示した資料は８号住居跡の10点、９号住居跡の４点である。いずれも土器破片の周囲を削る、あるいは研磨して円形としている。各法量、重量等については第12表にまとめた。

第12表　第１次調査土製品観察表

図版番号	製品名	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置
第68図１	土製円板	3.0	2.7	0.7	6.8	SJ8–303
第68図２	土製円板	2.9	2.9	1.0	9.3	SJ8–608
第68図３	土製円板	3.2	3.3	0.8	10.8	SJ8–345
第68図４	土製円板	3.8	3.7	0.9	16.4	SJ8–1063
第68図５	土製円板	4.0	3.7	1.0	19.2	SJ8–698
第68図６	土製円板	2.3	2.7	0.9	6.9	SJ8–944
第68図７	土製円板	2.5	2.9	1.0	9.3	SJ8–576
第68図８	土製円板	1.0	1.0	0.6	3.8	SJ8–912
第68図９	土製円板	1.2	2.5	1.2	7.8	SJ8–649
第68図10	土製円板	2.7	2.7	0.9	9.0	SJ8–1040
第68図11	土製円板	2.7	2.7	0.9	6.9	SJ9–271
第68図12	土製円板	2.7	2.8	0.8	7.6	SJ9–251
第68図13	土製円板	3.0	2.8	1.1	12.9	SJ9–320
第68図14	土製円板	4.9	5.1	1.0	32.5	SJ9–305



第69図　石製品

（６）石製品（第69図、第13表）

１は６号住居跡の柱穴から出土した小型磨製石斧である。刃部が遺存する。形状は定角式であり、刃部はわずかに弧を描く。石質は蛇紋岩が使用されている。

第13表　第１次調査石製品観察表

図版番号	器　種	石　材	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置
第69図１	小型磨製石斧	蛇紋岩	(3.4)	3.8	1.1	27.5	SJ6-50

（７）圧痕土器

デーノタメ遺跡出土土器については、その表面または断面に残された種子圧痕の調査を行った。その結果、第１次調査出土の土器では27点の種子圧痕等を検出した。

なお、圧痕観察については㈱パレオ・ラボに委託して分析を行い、その結果を第Ⅵ章第５節でまとめた。

１号住居跡出土土器（第70図１～３）

１は深鉢形土器の口縁部で口唇が先鋭する。２は胴部片で、LR の単節縄文が地文として施される。３は浅鉢形土器の屈曲部で、隆帯が貼付されて肥厚する。

３号住居跡出土土器（第70図４）

４は加曾利ＥⅠ式の深鉢形土器の胴部片である。RL の単節縄文を地文として、隆帯による懸垂文が施される。隆帯からは弧状のモチーフが派生する。

４号住居跡出土土器（第70図５～７）

５～７は加曾利Ｅ式の土器である。５は深鉢形土器の頸部付近の資料である。隆帯上まで RL の単節縄文が地文として施される。６は無文の浅鉢形土器で口縁部が肥厚して内湾する器形である。７は器種不明の土器である。

６号住居跡出土土器（第70図８～11）

８は勝坂式土器で、広い頸部無文帯の直下に交互短沈線を施した隆帯が横位に廻る。９は加曾利Ｅ式土器の口縁部片である。横位の隆帯は区画文の一部と考えられ、内部に LR の単節縄文を施す。10、11は加曾

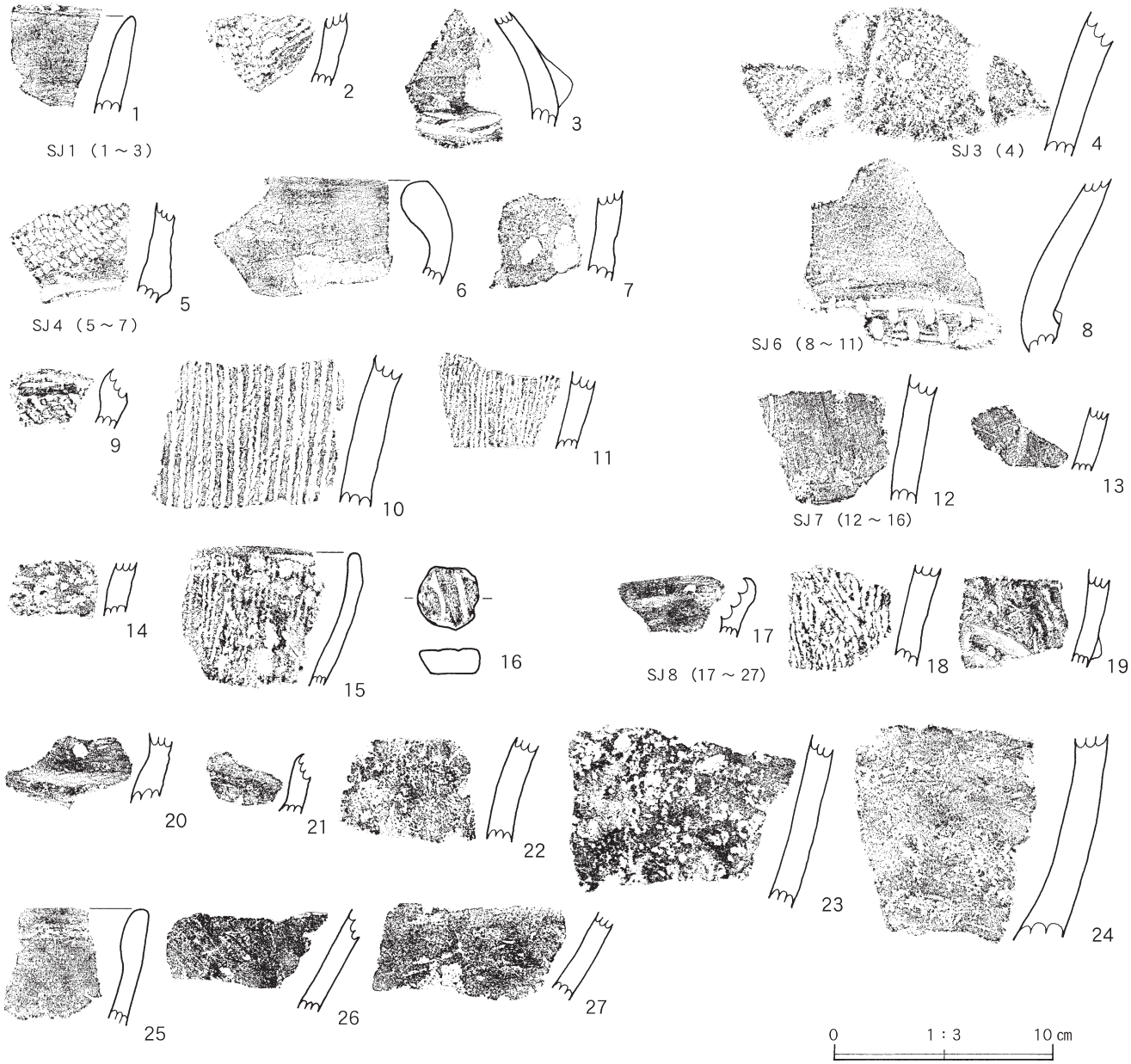
利Ｅ式土器の胴部片で、撚糸文が施される。

７号住居跡出土土器（第70図12～16）

12～14は加曾利Ｅ式土器である。12は深鉢形土器の頸部無文帯と思われる。13は底部付近の資料で浅い沈線が垂下する。14は胴部片で浅い沈線で懸垂文が描かれる。15は小型の鉢形土器で、内湾しながら立ち上がる器形である。縦位の撚糸文が地文として施される加曾利ＥⅣ式であろう。16は土製円板で、勝坂式土器の転用である。

８号住居跡出土土器（第70図17～27）

17は加曾利Ｅ式の浅鉢形土器の口縁部片であろう。18は深鉢形土器の胴部片で、縦位の撚糸文が地文で施される。19は加曾利Ｅ式で隆帯による弧状のモチーフが描かれる。20～22は深鉢形土器の頸部付近の資料であると思われる。23は縄文中期の深鉢形土器で頸部無文帯であろう。24は深鉢形土器で底部付近の破片資料で無文である。25～27も縄文中期の浅鉢形土器である。25は内側へ折り返し口縁となって肥厚する。26、27は胴部片である。



第70図　種子圧痕検出土器